

第4節 第152次調査4区の成果

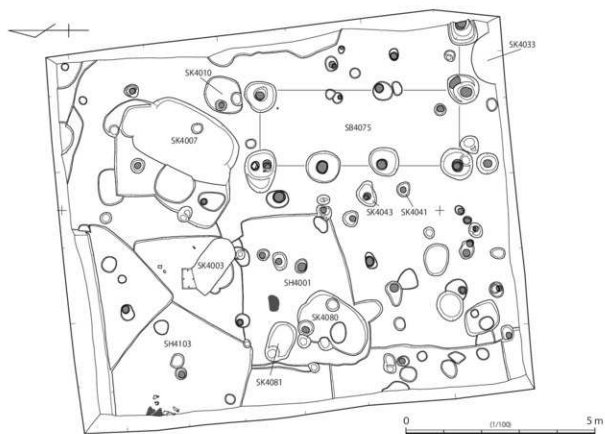
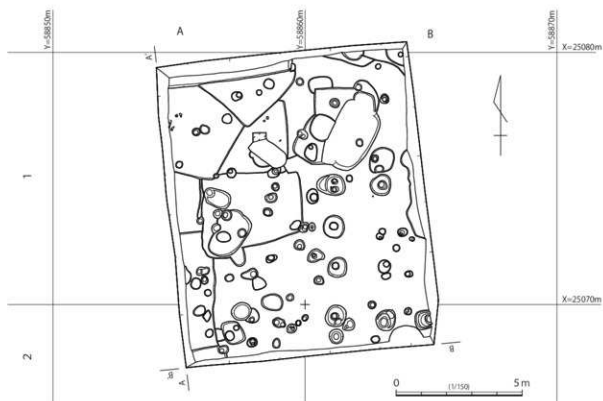
(1) 調査の概要と経過

調査の概要 都市計画道路庄の原佐野線（下郡工区）街路改良事業に伴う下郡遺跡群の発掘調査は、事業の進捗や用地状況に応じて調査区を設定した。第152次調査においては、1区から4区の調査区を設定し、順次調査を行った。本節で報告する4区は、令和4年度に実施した第151次調査時の2区と隣接する箇所位置する。調査地は大大分市下郡南3丁目に所在し、地番は100・101、地目はいずれも宅地である。調査前の標高は7.3mを測る。本調査区は大大分市教育委員会による下郡遺跡群第69次調査の調査区と東側が接しており、北側は151次調査2区同様、第87次調査地に隣接している。調査区の形状はほぼ正方形を呈しており、発掘調査面積は120.0㎡である。本調査区の発掘調査では弥生時代・古代に属する遺構を確認した。遺構の分布はほぼ調査区の全体に認められ、特に空白域のような空間は存在しない。他の調査区と同様に、全体的に遺構の重複が激しく、また遺構埋土と基盤となる土層が酷似しており遺構プランや切り合い関係の把握は困難を極めた。その一方で、後世に削平を受けたと思われる箇所も多く確認した。そのため、ある遺構の発掘中に本来はそれを切る遺構を新たに把握するなど、切り合い関係を十分に押さえられなかったものも少なからず存在する。従って遺物の混在は完全には排除できなかった。

調査の経過 4区の調査は令和5年11月7日から同年12月25日まで実施した。他の調査区での調査も並行して行いながら、11月8日には4区の表土掘削を開始し、11月13日に調査対象地の表土掘削を完了した。11月16日から遺構検出を行い、12月21日には空撮を実施した。12月7日には、県土木建築部の視察を受け、建設政策課及び大大分土木事務所に向けて発掘調査の概要を紹介した。期間中、事業者である大大分土木事務所及び周辺工事請負業者からなる「庄の原佐野線安全連絡協議会」が定期的に開催され、埋蔵文化財調査の進捗共有・工事の進捗把握を目的に会議へ参加した。12月22日には調査区内での作業を完了し、埋戻しへ入った。そして12月25日には埋戻しを完了し、令和7年1月には大大分土木事務所立会のもと、現地調査完了の確認を行った。現地確認をもって4区での調査を完全に終了した。

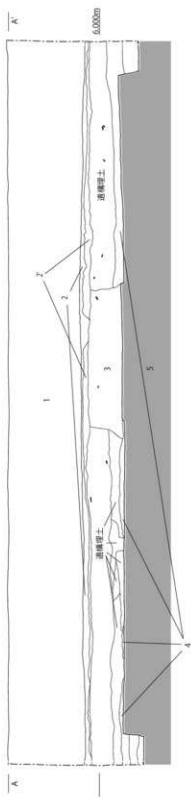


第90図 下郡遺跡群の調査区配置図 (1/3,000)

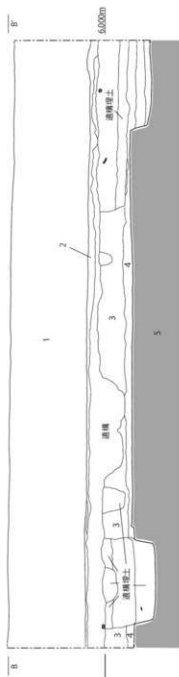


第91図 4区遺構配置図 (1/100、1/150)

調査区西壁土層断面図



調査区南壁土層断面図



1. 第1層 赤土(バラス・黄色砂・小礫・シルト) 現代盛土 西側と東側では堆積の厚さに差がある 旧表土を水平にカットしており、その上に盛土する
2. 第2層 旧表土(赤褐色土) 盛土される以前の旧地表面、緩い水平に堆積する
3. 第3層 2区発出層(暗茶褐色土) 地かな土割片や地土が多数に混じる 水平に堆積しており、多くの遺構がこの層から掘りこまれると考えられる
4. 第4層 遺構発出層(暗茶褐色土) 明確に遺構が確認できる 黄褐色の硬石(スコーリア)を多量に含む層(硬石は3～5mm大)
5. 地山(明褐色土色のシルト及び砂) 遺構の掘り込みもほぼ確認できない

第92図 4区土層断面図(1/60)

(2) 調査区の基本層序 (第92図)

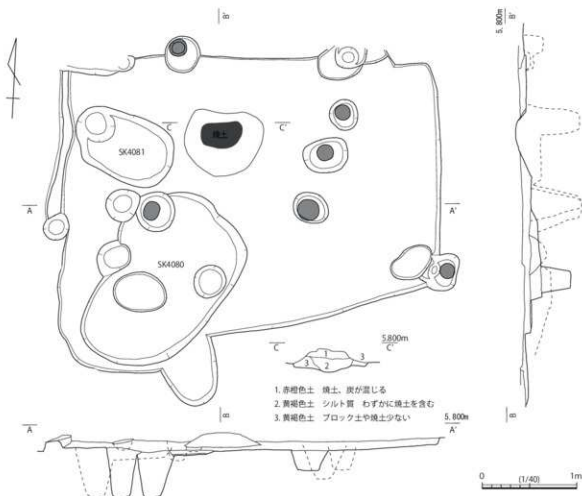
4区の調査区土層断面図を第92図に示した。151次調査2区と隣接するため基本土層はほぼ共通する。第1層は現代の客土であり、土地区画整理事業の際に調査地を含む一帯で盛土されたものである。第2層は旧表土の残りである。2層直下に粘性の高い暗茶褐色土の第3層が確認でき、遺物を多量に含んでいた。断面の観察から、一定数の遺構はこの面から掘り込まれる状況を確認した。第3層直下には本来の基盤土層となる第4層（明茶褐色土層）が広がる。工事の進捗の都合上、迅速に調査を進める必要があったため、この層の上面を遺構検出面に設定して掘削を行った。この層の下部には地山に該当する黄土色からなるシルト・砂質の層が確認でき、遺物や遺構は全く見られなくなる。さらに掘削すると硬く締まった完全な砂層となる。

(3) 主要な遺構と遺物

152次～4区において確認した主要な遺構・遺物について、遺構の種別順に報告する。

1. 竪穴建物 (SH)

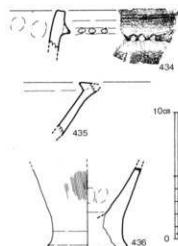
竪穴建物は、調査区北西部、A1グリッド内に集中する。各遺構はそれぞれ重複しており、大きく切り合う。また、いずれの竪穴建物も調査以前に大きく削平を受けていたものと想定でき、ほぼ床面直上部分のみしか確認できなかった。



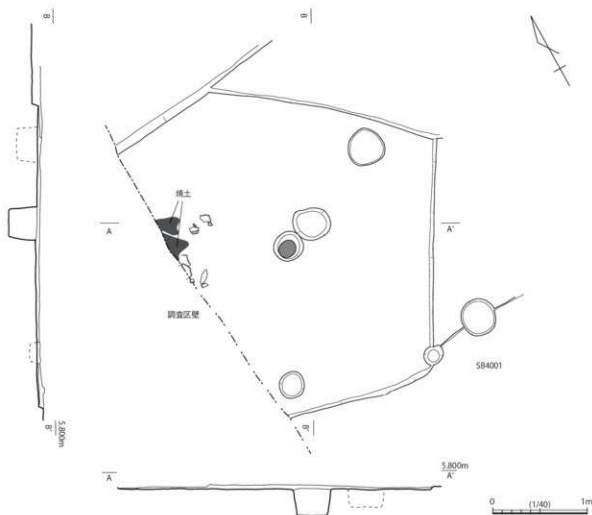
第93図 152-SB4001 実測図 (1/40)

152-SH4001 (第93図)

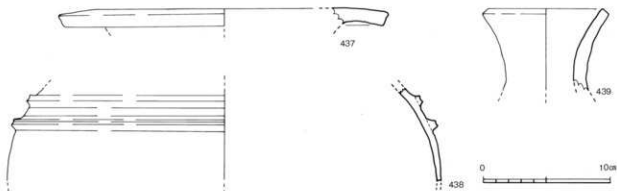
4区、A1グリッド内の調査区西壁に面して検出した建物跡である。多数の遺構と重複しており、北側は別の遺構に切られる形で検出した。SH4001の平面形状は隅丸方形をなし、若干長方形気味となる。長辺4.2m、短辺3.1m、深さは比高で0.1mを測る。検出時はほぼ床面最低部であり、堆積状況は確認できなかった。周辺の遺構により削平されたものと考えられる。中央部では地床炉と想定できる焼土塊が堆積しており、断面の観察から3層に分けることができた。柱穴配置については判然としないが、4本柱である可能性がある。遺物は弥生土器が数点出土した。先述のとおりの遺構の重複による混入も想定できるが、遺物同士で時期的に大きな齟齬は見られないため、遺構の時期を弥生時代中期に位置づける。



第94図 152-SB4001 出土遺物実測図 (1/3)



第95図 152-SB4103 実測図 (1/40)



第96図 152-SB4103 出土遺物実測図 (1/3)

152-SH4001 出土遺物 (第94図)

434は下城式甕形土器の口縁端部片である。色調はにぶい黄褐色を呈する。口唇上部は平坦に成形され、直下に1条の刻目突帯が施される。436は弥生土器の底部片である。復元底部径は6.0 cmを測り、色調はにぶい褐色を呈する。これらの資料は弥生時代中期に比定できる。

152-SH4103 (第95図)

2区、A1グリッド内の調査区西壁に面して検出した建物跡である。多数の遺構と重複しており、北側は別の遺構に切られる形で検出した。SH4103の平面形状は隅丸方形形状をなす。残存値であるが、長辺3.2 m、短辺2.8 m、深さは比高で0.4 mを測る。遺物は弥生土器が数点出土しており、図化可能な3点を図示した。SB4103の時期は弥生時代中期であると判断する。

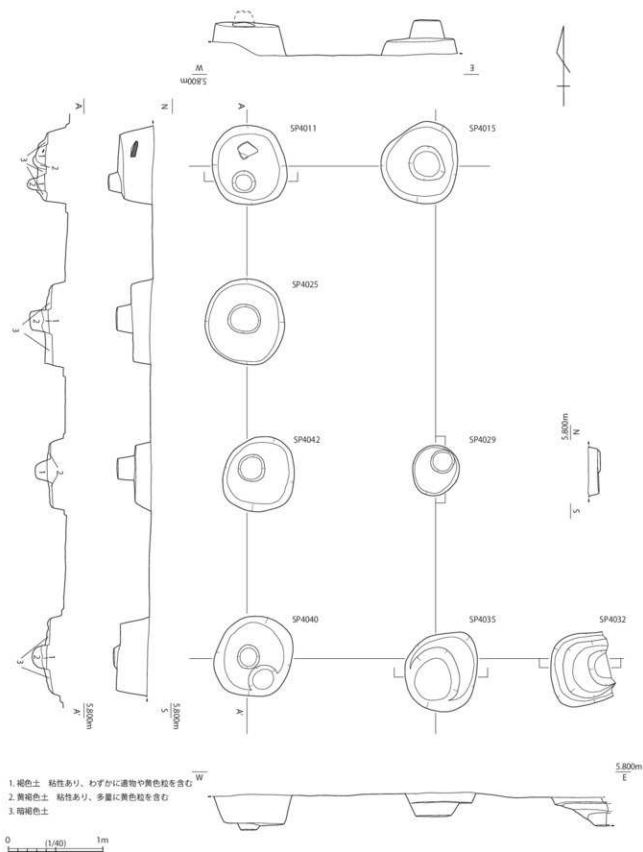
152-SH4103 出土遺物 (第96図)

437は弥生土器の甕形土器である。復元口径は20.0 cmを測り、色調は淡褐色を呈する。ナデの痕跡が確認できる。438は弥生土器の甕形土器の胴部である。胴部最大径は復元値で33.6 cmを測り、色調は灰褐色を呈する。肩部にあたる箇所には、2条の貼付突帯が確認でき、丁寧にナデつけられて平滑な形状をなす。439は弥生土器の器台である。上半部が残存する。復元径は9.0 cmを測り、色調は赤褐色を呈する。

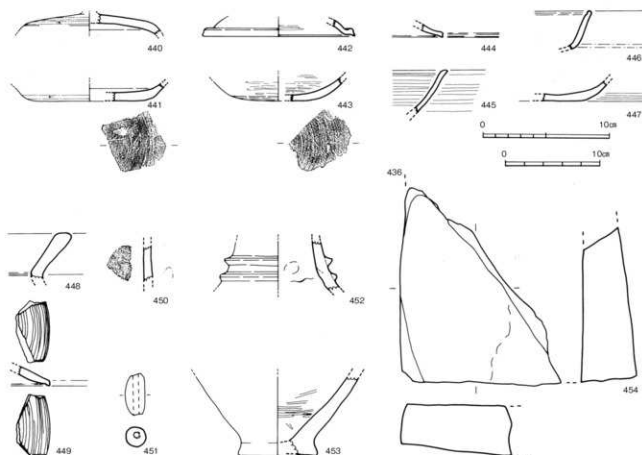
2. 掘立柱建物 (SB)

152-SB4075 (第97図)

B1・B2グリッド間内で検出した建物跡である。建物の東部分は調査区外へ展開するため、建物の全容は明らかにできなかった。柱穴はSP4011、SP4015、SP4025、SP4029、SP4032、SP4035、SP4040、SP4042の8基で構成される。東西1間、南北3間の総柱建物である。各柱穴列の主軸線が必ずしも整合せずやや歪な箇所もあるが、柱穴の配置や規模、埋土の共通性等特徴から掘立柱建物跡と判断した。遺物はSP4015を中心に各柱穴から数点ずつ出土しており、土師器や須恵器を中心に弥生土器の破片が確認できた。弥生土器を除けば9世紀代に位置付けできる。



第 97 図 152-SH4075 実測図 (1/40)

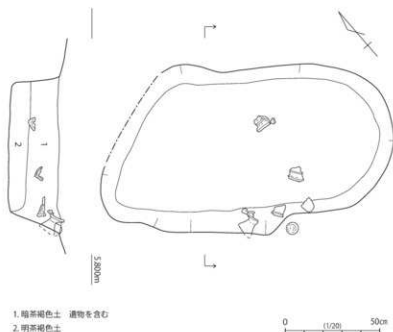


第98図 152-SH4075 出土遺物実測図 (1/3)

152-SH4075 出土遺物 (第98図)

SH4075を構成する8基の各柱穴から出土した遺物を第96図に示した。

440は須恵器の坏蓋である。破片資料であるが、頂部にかけて若干立ち上がる形状となるため、本来はツマミが付属していたものと思われる。色調は暗灰色を呈する。SP4015から出土した。441は須恵器の坏である。底部が残存するのみであり、口径等の復元はできなかった。色調は灰褐色を呈する。内外面ともに回転ナデが施される。SP4015から出土した。442は土師器の坏蓋である。口縁端部が強く屈曲する形状をなす。復元口径は12cmをなし、色調は明褐色を呈する。胎土には角閃石や長石が若干確認できる。SP4015か

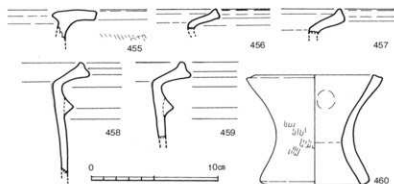


1. 暗茶褐色土 遺物を含む
2. 明茶褐色土

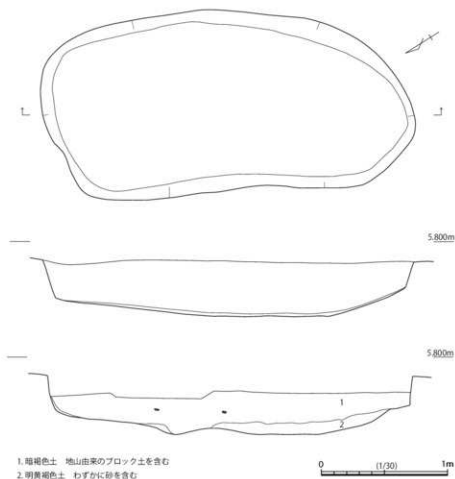
第99図 152-SK4003 実測図 (1/20)

ら出土した。443は土師器の坏である。色調は茶褐色を呈する。SP4015から出土した。444から447は土師器の破片資料である。444は土師器坏蓋である。色調は黄橙色を呈する。回転ナデで仕上げられる。445は土師器坏である。色調は黄橙色を呈する。444・445はSP4025から出土した。446は土師器坏の口縁部片である。色調は淡黄色を呈する。447は土師器坏の底部片である。色調は橙色を呈し、外面にはミガキが確認できる。446・447はSP4035から出土した。448は土師器の甕口縁部片である。いわゆる企救型甕の破片であると思わ

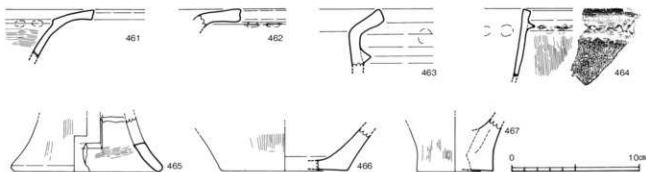
れる。口唇部は肥厚し頂部は平坦な形状となる。色調は黄橙色を呈する。調整はナデが施される。SP4040から出土した。449は土師器の坏蓋片である。口縁端部が残存する。色調は黄橙色を呈する。内外面ともに丁寧にミガキが施される。SP4040から出土した。450は製塩土器の破片である。胴部片であり、内面には布目痕が確認できる。色調はにぶい橙色を呈する。SP4025から出土した。451は管状土鉢である。完形であり、長さcmを測る。色調は褐色を呈する。452は弥生の壺形土器である。頭部が残存する。2条の貼付突帯が巡らされ、突帯断面形状は三角形をなす。色調は明褐色であり、内外面ともにナデで仕上げられる。弥生時代中期の所産と思われる。SP4011から出土した。453は弥生土器の底部である。復元底部径は6.2cmを測り、色調は淡黄色を呈する。胎土には角閃石・長石を多く含む。SP4032から出土した。454は安山岩の板石である。扁平であり、面取りが施される。礎石の可能性がいろいろ。SP4011から出土した。



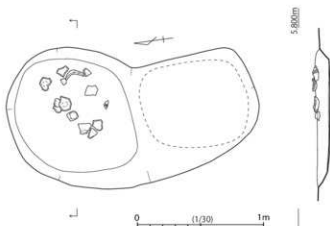
第100図 152-SK4003 出土遺物実測図 (1/3)



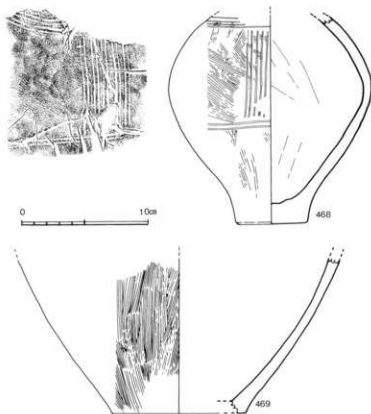
第101図 152-SK4007 実測図 (1/30)



第102図 152-SK4007 出土遺物実測図 (1/3)



第103図 152-SK4010 実測図 (1/30)



第104図 152-SK4010 出土遺物実測図 (1/3)

3. 土坑 (SK)

土坑は調査区内の全域で確認した。

152-SK4003 (第99図)

A 1 グリッド内で検出した土坑である。平面形は楕円形状を呈し、長辺 1.45 m、短辺 0.78 m、深さ 0.26 m を測る。埋土はシルト質の茶褐色土で、粘性が強く細かなブロック土を含む。遺物は弥生土器を中心に土器片を 10 点ほど出土しているが、それら遺物から弥生時代中期に属する遺構であると判断した。

152-SK4003 出土遺物 (第100図)

SK4003 から出土した遺物を第100図に図示した。いずれも弥生土器である。455 は壺形土器の口縁端部片である。456 ～ 459 は東北部九州系の甕形土器片である。いずれも口縁部が残存する。460 は粗製の器台である。口径 9.2 cm、底部径 7.4 cm に復元でき、器高は 8.7 cm を測る。色調はにぶい橙色を呈する。

152-SK4007 (第101図)

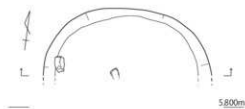
A 1 グリッドで検出した長土坑である。平面形は楕円形状を呈し、長辺 2.9 m、短辺 1.4 m、深さ 0.2 m を測る。堆積状況は 2 層に分類できるが、遺物は第 1 層から出土した。

152-SK4007 出土遺物 (第102図)

SK4007 から出土した遺物を第102図に示した。いずれも弥生土器である。461は壺形土器の口縁部である。色調は淡明褐色を呈する。鋤先状口縁を有しており、須玖系に属する資料である。462は壺形土器の口縁端部資料である。463は東北部九州系の甕形土器である。口縁端部をつまみ上げ、頸部外面下には1条の突帯が施される。464は下城式甕形土器である。口縁部下に1条の刻目突帯が巡らされる。465は高坏形土器の脚部片である。長方形の透かし孔が確認できる。466・467は底部資料である。

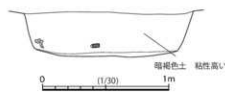
152-SK4010 (第103図)

A1グリッドで検出した長土坑である。平面形は楕円形状を呈し、2つの土坑が組み合うような形状をなす。検出時は別々の遺構として認識していたが、堆積状況を精査した結果、埋土は同一であったため、1つの遺構として認識した。北半部には下城式壺形土器の破片が集中しており、破片を接合したところ2点の個体に復元することができた。遺構の年代は弥生時代中期に比定できる。

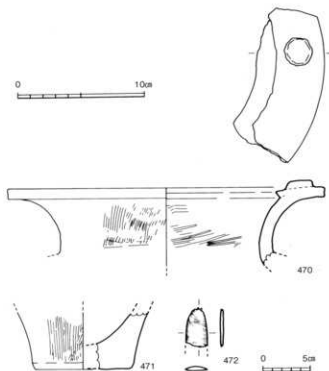


152-SK4010 出土遺物 (第104図)

SK4010 出土遺物を第104図に示した。468は下城式甕形土器である。口縁部から頸部を欠損するが、胴部から底部は完存する。器高は残存値で16.4cmを測る。色調は褐色を呈する。外面器壁には半截竹管状工具を用いた2条1組の施文が施され、横方向に並行する沈線に挟まれるかたちで縦方向の平行線が10条確認できる。内外面ともにナデで仕上げられ、外面は丁寧に成形され平滑になっている。底部は平底である。469は弥生土器の底部片である。底部径は復元値で10.6cmを測り、色調は黒褐色を呈する。調整にはハケ、ナデが確認でき、外面には強いハケ目が残る。胎土には角閃石を若干含むが、その他の含有物は見られない。底部は平底をなす。



第105図 152-SK4033 実測図 (1/30)

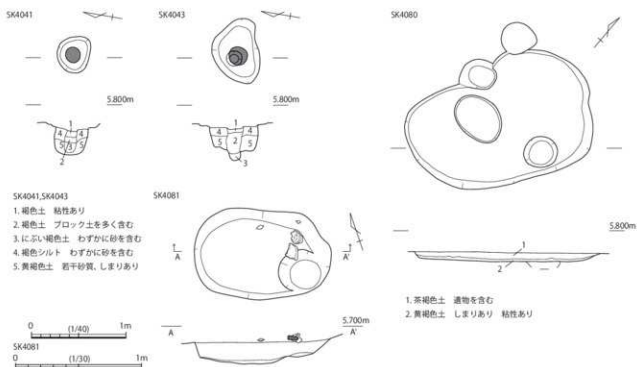


152-SK4033 (第105図)

B2グリッド北東部で検出した土坑である。南半部は調査区の壁面に接しており、遺構の半分は確認できなかった。遺構の堆積は単層からなり、内部は粘性の高い暗褐色土で充填されていた。遺構の時期は弥生時代中期と思われる。

第106図 152-SK4033 出土遺物実測図 (1/3)

第3章 調査の成果



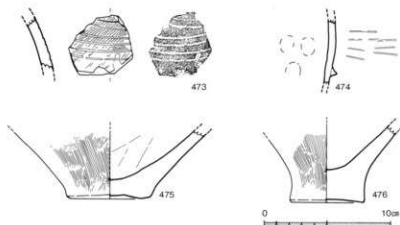
第107図 152-SK4041・SK4043・SK4080・SK4081 実測図 (1/30, 1/40)

152-SK4033 出土遺物 (第106図)

SK4033 からは3点の遺物が出土した。470・471は弥生土器である。470は壺形土器の口縁部片であり、口径が25.0 cmに復元できる。色調は灰褐色を呈しており、胎土に角閃石や長石を多く含む。471は底部資料である。色調は橙色を呈し、胎土には角閃石や長石を多く含む。内外面ともにナデの痕跡が確認できる。472は磨製石鏃である。下半部が欠失する。石材は結晶片岩である。

152-SK4041 (第107図)

B1グリッド内で検出した土坑である。柱穴状をなすが、SK4043のほかに周辺に組み合う遺構が確認できなかったため、土坑として報告する。遺物は出土しなかった。



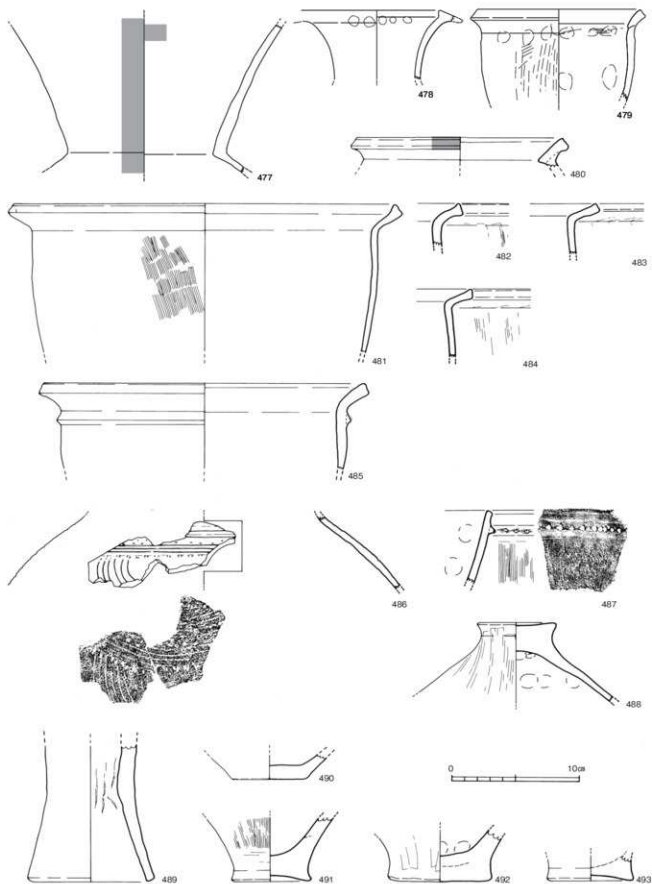
第108図 152-SK4080・SK4081 出土遺物実測図 (1/3)

152-SK4043 (第107図)

B1グリッドで検出した。SK4041に近接し、遺構の堆積も似る。

152-SK4080 (第107図)

A1グリッドで検出した大型の土坑である。SH4001を切って形成される。遺構の規模は、長辺1.5 m、短辺0.9 m、深さ0.1 mである。遺構内からは遺物が2点出土したが、SK4080の上にも更に遺構が重なり、



第109図 4区表土出土遺物実測図 (1/3)

第3章 調査の成果

混入の可能性も否定できないため、遺構の時期の位置づけは困難である。

152-SK4080 出土遺物 (第108図)

473は下城式壺形土器の胴部片であると思われる。外面器壁に重弧文が施されている。474は弥生土器の胴部片である。器種は甕や鉢が想定される。

152-SK4081 (第107図)

A1グリッドで検出した土坑である。SK4080に近接する。土坑内から土器片が2点出土した。

152-SK4081 出土遺物 (第108図)

475・476は弥生土器の底部資料である。いずれも平底を呈するが、若干上げ底気味となる。

(4) その他の遺物

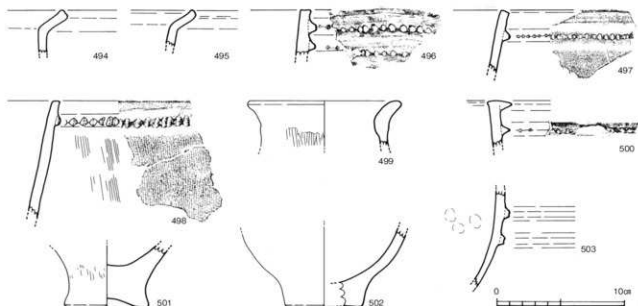
4区における出土資料のうち、特定の遺構に帰属しない遺物を第109図と第110図に示した。これらの遺物は、表土の機械掘削時や人力による遺構検出作業時の出土、あるいは排土から採集したものである。

1. 表土出土遺物 (第109図)

表土掘削時に出土した遺物を第109図に示す。図示可能な遺物は477～493の17点であり、いずれも弥生土器である。477は広口壺の頸部片である。残存高は11.9cmを測り、色調は灰白色を呈する。内外面ともに赤色顔料が一部確認できる。器壁の摩滅により調整を詳細に観察することは難しかったが、ナデの痕跡が残る。須玖Ⅱ式に比定できる広口壺資料である。478は壺形土器の口縁部から頸部にかけての破片である。口縁部は鋤先状をなす。479は甕形土器の破片である。480は壺形土器の口縁部片である。481～485は東北部九州系の甕型土器である。485のみ口縁部下に1条の貼付突帯を有する。486は下城式壺形土器の胴部片である。胴部でも頸部に近い部分の破片であると思われる。色調は赤茶色を呈する。外面をナデで調整した後、半截竹管状の二又工具を用いて、器壁全体に2状1組からなる施文を施している。上半部には平行線文が2段に分け施文され、その間を刺突文で充填するように施文している。下半部には重弧文が確認でき、2条1組となっている様子が確認できる。487は下城式甕形土器の口縁部片である。口縁部下に1条の刻目突帯が巡る。色調は暗茶褐色を呈する。突帯下には強いハケ目が確認できる。488は蓋型土器である。持手の径は6.0cmを測り、器高は6.3cmが残存する。色調は明橙色を呈する。弥生土器底部片の可能性があるが、器壁が大きく外へ延びる点を考慮して蓋形土器片と判断した。489は器台である。残存高10.7cmを測り、底部径は4.8cmに復元できる。色調は灰白色を呈する。490～493は底部資料である。いずれも平底である。493は若干上げ底気味となる。

2. 検出時出土遺物 (第110図)

遺構検出作業時に出土した遺物を第110図に示す。494～503の10点はすべて弥生土器である。494・495は東北部九州系の甕形土器口縁部の破片である。495は摩滅により表面情報を得ることができなかった。色調は浅黄色を呈する。494の色調はにぶい褐色を呈し、胎土に角閃石や長石を多く含む。496～498は下城式甕形土器である。いずれも口縁部片である。496は口縁部直下に2条の刻目突帯を有する資料である。内



第110図 4区検出時出土遺物実測図 (1/3)

外面ともにナデで調整される。色調はにぶい橙色を呈する。497は口縁部からやや下がった位置に1条の刻目突帯を有する。色調は灰黄褐色を呈する。498は口縁部下に1条の刻目突帯が巡らされる。色調はにぶい橙色である。499は壺形土器の口縁部であろう。復元口径は11.8 cmを測り、色調はにぶい褐色を呈する。口縁部は肥厚しており、端部は丸い形状となる。500・503は広口壺の破片である。500は口縁部片であり、口唇部は突帯状を呈する。下部には1条の突帯が施され、細かな刻目が確認できる。色調は浅黄褐色を呈する。503は胴部片であり、2条の突帯を有する。色調は灰黄褐色を呈する。501・502は底部資料である。501は平底であるが、若干上げ底気味となる。502は平底で、球胴をなす胴部から屈曲して底部にいたる形状をなす。

第4章 自然科学分析

下郡遺跡群（第151次調査）における自然科学分析

一般社団法人 文化財科学研究センター

I. はじめに

下郡遺跡群は大分川河口近くの東岸にある自然堤防上にあり、縄文時代後期から現代まで長期にわたり生活の痕跡がみられる。151次調査では中世から近代にいたる土坑、柱穴、溝、井戸、墓などの遺構が検出されている。今回はこれらの遺構について、自然科学分析を行い遺構の性格について考察する。

II. 試料

分析試料は、S-2134、S-2256、S-4025、S-4031より採取された試料と、2区黄色土、基準土（比較土）である。分析項目の詳細は以下の表に示す。

第5表 分析項目の詳細

遺構名	地点	リン・ カルシウム分析	花粉分析	寄生虫卵分析	種実同定	珪藻分析	テフラ分析
S-2134	A	○	○	(○)		(○)	
	B	○	○	(○)		(○)	
	C	○	○	(○)		(○)	
S-2256	A		○	○	○		
	B		(○)	○			
	C		○	○	○		
	D		○	○	○		
	E		○	○	○		
S-4025	A	○	○	○		○	
	B	○	○	○		○	
	C	○	○	○		○	
	D		○	(○)		○	
	E		○	(○)		○	
S-4031	A	○	○	○		○	
	B	○	○	○		○	
	C	○	○	○		○	
	D		○	(○)		○	
	E		○	(○)		○	
2区黄色土	1						○
	2						○
基準土 (比較土)	1	○					
	2	○					

(○)：参考試料

III. リン・カルシウム分析

1. はじめに

リン、カルシウムは生物にとって主要な構成元素であり、動植物中に普遍的に含まれる元素であるが、特に人や動物の骨や歯には多量に含まれている。生物体内に蓄積されたリンはやがて土壤中に還元され、土壌有機物や土壌中の鉄やアルミニウムと難溶性の化合物を形成することがある。特に活性アルミニウムの多い

火山灰土では、非火山性の土壌や沖積低地堆積物などに比べればリン酸の固定力が高いため、火山灰土堆積地に立地した遺跡での生物起源残留物の痕跡確認にリン酸含量は有効なことがある。ここではこれらの元素を分析することで、土坑の用途や性格などについて検討を行う。

2. 試料

試料は、S-2134 から A、B、C の 3 点、S-4025 から A、B、C の 3 点、S-4031 から A、B、C の 3 点の合わせて 9 点と比較対照試料として採取された基準土 2 点の合計 11 点の土壌である。

3. 分析方法

リン酸含量は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法、カルシウム含量は硝酸・過塩素酸分解－原子吸光法（土壌環境分析法編集委員会，1997；土壌標準分析・測定法委員会，1986）に従った。以下に各項目の操作工程を示す。

1) 分析試料の調製

試料を風乾後、土塊を軽く崩して 2 mm の篩で篩い分ける。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉碎し、0.5mm 篩を全通させ、粉碎土試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で 4 時間乾燥し、分析試料水分を求める。

2) リン酸、カルシウム含量

粉碎土試料 1.00g をケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸 (HNO₃) 約 10ml を加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸 (HClO₄) 約 10ml を加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で 100ml に定容し、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸 (P₂O₅) 濃度を測定する。別ろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光度計によりカルシウム (CaO) 濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量 (P₂O₅mg/g) とカルシウム含量 (CaOmg/g) を求める。

なお、数値の評価に際しては天然賦存量との比較を行うこととする。

第6表 リン酸・カルシウム分析結果

試料名		土色		全リン酸 P ₂ O ₅ (mg/g)	全カルシウム CaO (mg/g)
基準土	1 (比較用)	10YR3/2	黒褐	5.42	6.14
基準土	2 (比較用)	10YR3/2	黒褐	6.36	6.13
S-2134	A	10YR2/2	黒褐	7.66	12.03
S-2134	B	10YR2/2	黒褐	12.85	18.61
S-2134	C	10YR2/2	黒褐	7.10	9.28
S-4025	A	10YR3/1	黒褐	7.77	6.56
S-4025	B	10YR3/1	黒褐	6.01	6.25
S-4025	C	10YR3/1	黒褐	4.16	5.68
S-4031	A	10YR2/2	黒褐	4.74	5.24
S-4031	B	10YR2/2	黒褐	4.20	5.32
S-4031	C	10YR2/2	黒褐	4.92	5.12

(1) 土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。

4. 結果

リン酸、カルシウム分析結果を表2に示す。全リン酸は比較試料である基準土1で5.42mg/g、基準土2で6.36mg/gと多い。S-2134では7.10mg/g～12.85mg/gと比較試料より多い。S-4025では4.16mg/g～7.77mg/gと試料Cでやや少ない傾向にある。S-4031では4.20mg/g～4.92mg/gとやや少ない傾向にある。カルシウム含量は比較試料である基準土で6.13mg/g～6.14mg/gである。S-2134では9.28mg/g～18.61mg/gと比較試料より多い。S-4025では5.68mg/g～6.56mg/gと試料Cでやや少ない傾向にある。S-4031では5.12mg/g～5.32mg/gとやや少ない傾向にある。

5. 考察

リン酸含量、いわゆる天然賦存量は、土壌中のものの報告事例がいくつかあり、土壌中に普通に含まれる、これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約3.0mg/g程度である(Bowen, 1983; Bolt・Bruggenwert, 1980; 川崎ほか, 1991; 天野ほか, 1991)。また、人為的な影響(化学肥料の施用など)を受けた黒ボク土の既耕地では5.5mg/g(川崎ほか, 1991)という報告例があり、これまでの分析調査事例では骨片などの痕跡が認められる土壌では6.0mg/gを超える場合が多い。一方、カルシウムの天然賦存量は普通1～50mg/g(藤貫, 1979)といわれ、含量幅がリン酸よりも大きい傾向にある。これは、リン酸に比べると土壌中に固定され難い性質による。これら天然賦存量は、遺体の痕跡を明確に判断できる目安として重要ではあるが、天然賦存量以下だからといって遺体埋納を全て否定するものではない。遺体が土壌中で分解した後、その成分が時間経過とともに徐々に系外へと流亡し、その結果含量が天然賦存量の範囲となってしまうことも考えられるからである。

今回の分析調査では、全ての試料においてリン酸の天然賦存量を超える結果が得られた。ただし、比較試料である基準土1、基準土2のリン酸含量も多い傾向にある。リン酸が多いのは土地利用履歴(施肥履歴等)が関連している場合もあり一概に判断の難しい場合もある。比較試料よりリン酸を多く保持する試料は、S-2134のA、B、C、S-4025のAである。他の試料群については、比較試料と同等またはそれ以下の成分量である。S-2134遺構では、特徴的に多くリン酸含量、カルシウム含量が保持されたことから、遺体埋納等の人為による影響があった可能性が挙げられる。また、S-4025については、カルシウム含量が比較試料よりわずかに多く保持されているに留まるが、リン酸含量は比較試料より多く保持されているため、なんらかの人為による成分増加の可能性が考えられる。

よって、今回の分析結果からは、S-2134、S-4025において、遺体埋納やその他、人為による成分の増加の可能性が考えられる。

S-4031では成分が少なく人為による成分増加等はなかったと考えられる。しかし比較試料である基準土において、リン酸含量、カルシウム含量が多いことから、比較のみで言い切れないことも考えられる。

IV. 花粉分析

1. はじめに

花粉分析は、第四紀学で多く扱われ、生層序によるゾーン解析で地層を区分し、ゾーン比較によって植生や環境の変化を復元する方法である。そのため普通は湖沼などの堆積物が対象となり、堆積盆単位など比較的広域な植生・環境の復元を行う方法として用いられる。遺跡調査においては遺構内の堆積物など局地的でかつ時間軸の短い堆積物も対象となり、より現地性の高い植生・環境・農耕の復元もデータ比較の中で行え

る場合もある。さらに遺物包含層など、乾燥的な環境下の堆積物も対象となり、その分解性も環境の指標となる。また、風媒花や虫媒花などの散布能力などの差で、狭い範囲の植生に由来する結果が得られるなど、陸地の堆積物が分析に適さないわけではない。

2. 方法

花粉の分離抽出は、中村(1967)の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から1cmを採量 12 古墳
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム(12 水) 溶液を加え 15 分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.25mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置
- 5) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸 9 : 濃硫酸 1 のエルドマン氏液を加え 1 分間湯煎)を施す
- 6) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈渣にチール石炭酸フクシン染色液を加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製
- 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡(Nikon ECLIPSE Ci)によって 300 ~ 1000 倍で行った。花粉の分類は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン(—)で結んで示した。同定分類には所有の現生花粉標本、島倉(1973)、中村(1980)を参照して行った。イネ属については、チール石炭酸フクシンで染色を施すことにより特徴がより鮮明になるため、中村(1974, 1977)を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定している。なお、花粉分類では樹木花粉(AP) および非樹木花粉(NAP) となるが非樹木花粉(NAP) は草本花粉として示した。

3. 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉 6、樹木花粉と草本花粉を含むもの 1、草本花粉 8、シダ植物孢子 2 形態の計 17 分類群である。

これらの学名と和名および粒数を表 3 に示し、花粉密度が低い場合計数値で花粉ダイアグラムを図 1 に示す。主要な分類群は顕微鏡写真に示した。以下に出現した分類群を記載する。

[樹木花粉]

マツ属複雑維管束亜属、スギ、クマシダ属—アサダ、クリ、シイ属、コナラ属アカガシ亜属

[樹木花粉と草本花粉を含むもの]

クワ科—イラクサ科

[草本花粉]

イネ科、イネ属、カヤツリグサ科、アカザ科—ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、タンポポ亜科、ヨモギ属

[シダ植物孢子]

単条溝孢子、三条溝孢子

(2) 花粉群集の特徴

1) S-2134: A、B、Cともに花粉密度が極めて低く、Aからは花粉は検出されず、Bからはヨモギ属、Cからはスギ、イネ科、イネ属、ヨモギ属が極わずかに検出される。

2) S-2256: A、B、C、D、Eともに密度が極めて低く、花粉は検出されなかった。

3) S-4025: A、B、C、D、Eともに密度が極めて低く、Aからはイネ科、イネ属、Bからはクワ科-イラクサ科、イネ属、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、ヨモギ属、Cからはアカザ科-ヒユ科、アブラナ科、ヨモギ属、Dからは検出されず、Eからはアブラナ科、ヨモギ属が極わずかに出現する。

4) S-4031: A、B、C、D、Eにおいて、下部のA、B、Cでは、密度は低いものの、アブラナ科の出現率がやや高く、イネ科、イネ属、アカザ科-ヒユ科が伴われる。他にクワ科-イラクサ科、クリなどがわずかに出現する。上部のD、Eでは、アブラナ科はほとんどみられなくなり、イネ科などが極わずかに出現する。

4. 花粉分析から推定される植生と環境

1) S-2134では、A、B、Cともに花粉密度が極めて低く、花粉などの有機質遺体が分解される乾燥ないし乾湿を繰り返す堆積環境であったか、堆積速度が速かったと考えられる。わずかに検出されたイネ科、ヨモギ属は陽当たりのよい比較的乾燥した環境を好む人里植物で、周囲に生育していたと考えられ、堆積地は乾燥していたと推定される。

2) S-2256では、A、B、C、D、Eともに花粉は検出されず、花粉などの有機質遺体が分解される乾燥ないし乾湿を繰り返す堆積環境であったか、堆積速度が速かったと考えられる。

3) S-4025では、花粉密度が低く、花粉などの有機質遺体が分解される乾燥ないし乾湿を繰り返す堆積環境であったか、堆積速度が速かったと考えられる。下部のA、B、Cでアカザ科-ヒユ科、アブラナ科、ヨモギ属は、陽当たりのよい乾燥を好む人里雑草で、堆積地の周囲に生育していたとみなされ、堆積地はこれらの草本が生育する陽当たりのよい乾燥した堆積環境であったと考えられ、上部のD、Eでは、より乾燥化する。

4) S-4031では、下部のA、B、Cでアブラナ科の出現率がやや高く、イネ科、アカザ科-ヒユ科が伴われ、周囲にこれらの草本が生育していたとみなされ、陽当たりのよい乾燥した堆積環境であったと考えられる。アブラナ科には多くの栽培植物が含まれ、イネ属も出現し、周辺でアブラナ科の畑作や水田が行われた可能性が示唆される。上部のD、Eでは、乾燥により花粉は分解されたか、堆積速度が速く集積出来なかったと考えられる。

V. 寄生虫卵分析

1. はじめに

人、動物などに寄生する寄生虫の卵殻は堆積物中に残存しやすい。人が密度高く居住すると周囲の寄生虫卵の汚染度が高くなる。また、トイレ遺構等の糞便の堆積物では寄生虫卵密度が高く、他の堆積物と識別することができトイレ遺構を確認することも可能である。さらに、寄生虫の特有の生活史や感染経路から食物を探ることもできる。

2. 試料

分析試料は、花粉分析に用いられたものと同一試料である。

3. 方法

花粉分析処理で二分した試料のうち、アセトリシス処理を施さなかったプレバートで検鏡する。

4. 結果および考察

S-2134、S-2256、S-4025、S-4031のいずれの試料からも寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されない。分析の結果、寄生虫卵は検出されず、当初より混入していなかったか、乾燥した堆積環境で寄生虫卵が分解されたと考えられる。

VI. 種実同定

1. はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

2. 方法

試料（堆積物）に以下の物理処理を施して、抽出および同定を行う。

- 1) 試料 100 cm³（全量）に水を加え放置し、泥化
- 2) 攪拌した後、沈んだ砂礫を除去しつつ、0.25mm の篩で水洗選別
- 3) 残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実の同定計数

同定は形態的特徴および現生標本との対比で行い、結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

3. 結果

S-2256 からは種実は同定されなかった。なお、試料となった堆積物が、種実などの有機質遺体の分解される乾燥あるいは乾湿を繰り返す堆積環境で生成または保存されたと考えられる。

VII. 珪藻分析

1. はじめに

珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復原の指標として利用されている。

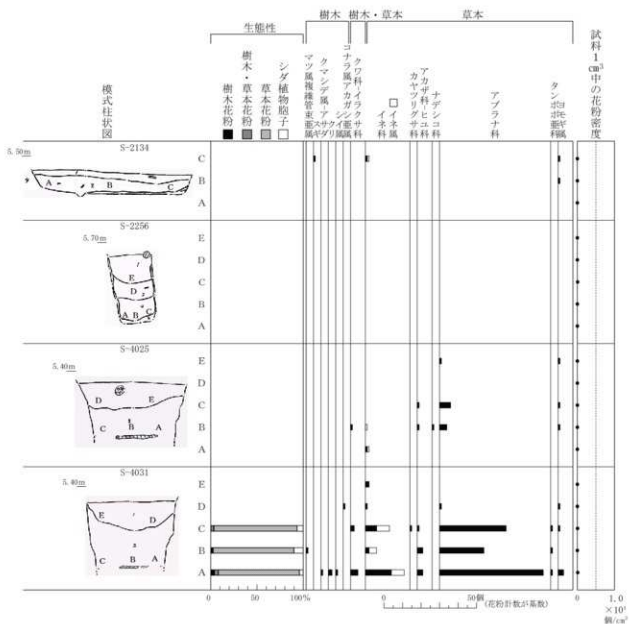
2. 方法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

- 1) 試料から 1 cm³を採量
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら 1 晩放置
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドを水洗（5～6 回）

第7表 花粉分析結果

Taxa (分類群)		S-2134			S-2256			S-4055			S-4031				
Scientific name (学名)	Japanese name (和名)	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	D	E
Aboreal pollen	樹木花粉														
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxydon</i>	マツ属常緑葉木亜属														
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ			1											1
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ														1
<i>Castanea crenata</i>	クリ														2
<i>Castanopsis</i>	シイ属														1
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属														
Aboreal+ Nonaboreal pollen	樹木・草本花粉														
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科														
Nonaboreal pollen	草本花粉														
Gramineae	イネ科			1											
<i>Oryza</i>	イネ属			1											
Cyperaceae	アカツリタナ科														
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科														
Caryophyllaceae	ナゲシコ科														
Cruciferae	アブラナ科														
Lacunculaceae	タンポポ科														
<i>Asteristia</i>	コキギ属														
Aboreal pollen	樹木花粉	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
Aboreal+ Nonaboreal pollen	樹木・草本花粉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0
Nonaboreal pollen	草本花粉	0	1	3	0	0	0	0	2	8	0	2	84	34	53
Total pollen	花粉総数	0	1	4	0	0	0	0	2	9	8	0	92	35	55
Pollen frequencies of 1cm ²	試料1cm ² 中の花粉密度	-	0.9	0.4	-	-	-	-	0.2	0.8	0.7	-	0.2	1.0	0.0
Unknown pollen	未特定花粉	-	$\times 10^{-10}$	-	-	-	-	-	$\times 10^{-2}$	$\times 10^{-2}$	$\times 10^{-2}$	-	$\times 10^{-3}$	$\times 10^{-2}$	$\times 10^{-2}$
Fern spore	シダ植物胞子	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
Monolete type spore	単条溝胞子														
Trilete type spore	三条溝胞子														
Total Fern spore	シダ植物胞子総数	0	0	0	0	0	0	0	0	4	5	1	1	4	4
Parasitic eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Stone cell	石細胞	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion remains	明らかでない消化残体	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal-wood fragments	炭屑・木片	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)
Charcoal-wood fragments	炭屑・木片	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)
未分析炭屑片	未分析炭屑片														
分析炭屑片	分析炭屑片	5.8	17.8	8.9	7.8	8.8	6.7	3.3	4.2	8.3	7.9	4.7	9.4	9.9	10.3
炭化遺体片 (炭化炭)	炭化遺体片 (炭化炭)														



第111図 花粉ダイアグラム

4) 残渣をマイクロピペットでカバーガラスに
滴下して乾燥

5) マウントメディアによって封入し、プレバ
ラート作製

6) 檢鏡、計數

検鏡は、生物顕微鏡 (Nikon ECLIPSE Ci) によって 600 ~ 1500 倍で行った。計数は珪藻被殻が 200 個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

3. 結果

(1) 分類群

試料から出現した珪藻は、真塩性種（海水生種）1分類群、真・中塩性種（海・汽水生種）3分類群、中塩性種（汽水生種）1分類群、中・貧塩性種（汽・淡水生種）1分類群、貧塩性種（淡水生種）92分類群である。破片の計数は基本的に中心域を有するものと、中心域がない種については両端2個につき1個と数えた。分析結果を表4に示し、珪藻総数を基数とする百分率を算定した珪藻ダイアグラムを図2に示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性はLowe (1974) の記載により、陸生珪藻は小杉 (1986) により、環境指標種群は海水生種から汽水生種は小杉 (1988) により、淡水生種は安藤 (1990) による。また、主要な分類群は顕微鏡写真に示した。以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記載する。

〔真一中塩性種〕

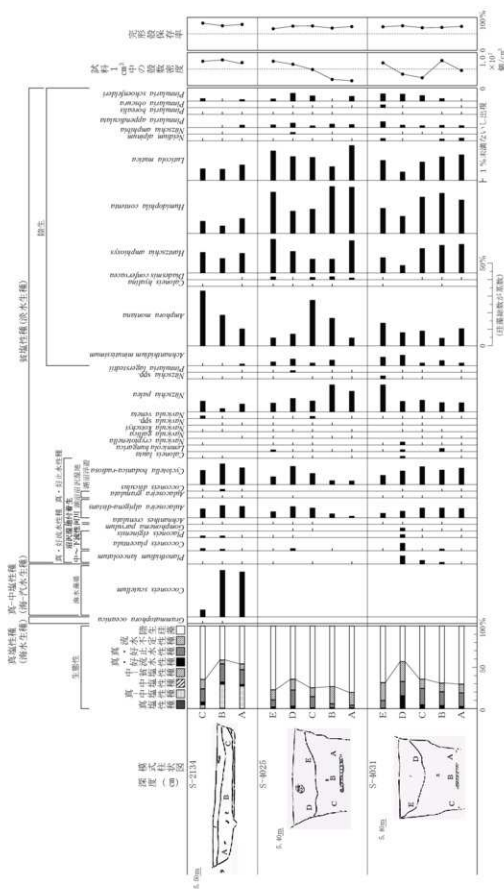
Cocconeis scutellum

〔省塩性種〕

Achnanthes crenulata, Achnantheidium
minutissimum, Amphora montana, Aulacoseira
alpigena-distans, Aulacoseira granulata,
Caloneis hyalina, Caloneis lauta, Cocconeis
disculus, Cocconeis placentula, Cyclotella
bodanica-radiosa, Diadegmis confervacea.

第8表 硅藻分析結果

[illegible]



Gomphonema parvulum, *Hantzschia amphioxys*, *Humidophila contenta*, *Lemnicola hungarica*, *Luticola mutica*, *Navicula cryptotenella*, *Navicula gallica*, *Navicula kotschy*, *Navicula* spp., *Navicula veneta*, *Neidium alpinum*, *Nitzschia amphibia*, *Nitzschia palea*, *Nitzschia* spp., *Pinnularia appendiculata*, *Pinnularia borealis*, *Pinnularia lagerstedtii*, *Pinnularia obscura*, *Pinnularia schoenfelderii*, *Placoneis elginensis*, *Planothidium lanceolatum*

(2) 珪藻群集の特徴

1) S-2134: A、B、Cにおいて、Aでは、真・中塩性種（海—汽水性種）が28%、陸生珪藻が46%、真・好止水性種が18%、流水不定性種が7%、真・好流水性種が1%を占める。真・中塩性種（海—汽水性種）で海水藻場指標種の *Cocconeis scutellum* の出現率が高く、次いで陸生珪藻の *Amphora montana*, *Hantzschia amphioxys*, *Humidophila contenta*, *Luticola mutica*、好止水性種の *Cyclotella bodanica-radiosa*、真止水性種で湖沼沼沢湿地種の *Aulacoseira alpigena-distans*、流水不定性種の *Nitzschia palea* が比較的多い。Bでは、Aとほとんど変わらないが、陸生珪藻の *Amphora montana* の割合が高い。Cでは、海水藻場指標種の *Cocconeis scutellum* の占める割合が4%程度と低く、陸生珪藻の *Amphora montana* の割合がより高い。

2) S-4025: A、B、C、D、Eにおいて、下部のAでは、真・好流水性種が1%、真・好止水性種が3%、流水不定性種が15%、陸生珪藻が81%を占める。陸生珪藻の *Humidophila contenta*, *Hantzschia amphioxys*, *Luticola mutica* の出現率が高く、流水不定性種の *Nitzschia palea* が伴われる。Bでは、真・好流水性種が1%、真・好止水性種が5%、流水不定性種が21%、陸生珪藻が73%を占める。Aと比較すると陸生珪藻の *Humidophila contenta* の出現率は同様に高いが、*Hantzschia amphioxys*, *Luticola mutica* の割合は半減し、*Amphora montana* が多い。Cでは、真・好流水性種が1%、真・好止水性種が13%、流水不定性種が11%、陸生珪藻が75%を占める。陸生珪藻の *Amphora montana* の出現率が高く、*Humidophila contenta*, *Luticola mutica*, *Hantzschia amphioxys* が伴われる。他に好止水性種の *Cyclotella bodanica-radiosa*、真止水性種で湖沼沼沢湿地種の *Aulacoseira alpigena-distans*、流水不定性種の *Nitzschia palea* が比較的多い。

上部のDでは、真・好流水性種が3%、真・好止水性種が20%、流水不定性種が13%、陸生珪藻が64%を占める。陸生珪藻の *Humidophila contenta*, *Luticola mutica*, *Hantzschia amphioxys* の出現率がやや高く、*Amphora montana* が伴われる。他に好止水性種の *Cyclotella bodanica-radiosa*、真止水性種で湖沼沼沢湿地種の *Aulacoseira alpigena-distans*、流水不定性種の *Nitzschia palea* が比較的多い。Eでは、真・好流水性種が2%、真・好止水性種が9%、流水不定性種が12%、陸生珪藻が77%を占める。陸生珪藻の *Humidophila contenta*, *Luticola mutica*, *Hantzschia amphioxys* の出現率がやや高く、低率に陸生珪藻の *Amphora montana*、好止水性種の *Cyclotella bodanica-radiosa*、真止水性種で湖沼沼沢湿地種の *Aulacoseira alpigena-distans*、流水不定性種の *Nitzschia palea* が出現する。

3) S-4031: A、B、C、D、Eにおいて、下部のA、B、Cは、珪藻の組成構成ともに類似した出現傾向を示す。陸生珪藻が64～70%を占め、*Humidophila contenta*, *Luticola mutica*, *Hantzschia amphioxys* の出現率がやや高く、*Amphora montana* が伴われる。他に好止水性種の *Cyclotella bodanica-radiosa*、真止水性種で湖沼沼沢湿地種の *Aulacoseira alpigena-distans*、流水不定性種の *Nitzschia palea* が出現する。

上部のDでは、真・好流水性種が16%、真・好止水性種が17%、流水不定性種が24%、陸生珪藻が43%を占める。特に優占する種は認められず、真・好流水性種では、中～下流性河川種の *Planothidium lanceolatum*、沼沢湿地地付着生種の *Cocconeis placentula*、好止水性種の *Cyclotella bodanica-radiosa*、

流水不定性種の *Nitzschia palea*、陸生珪藻の *Humidophila contenta*、*Amphora montana*、*Achnanthes minutissimum* などが出現する。Eでは、真・好流水性種が1%、真・好止水性種が9%、流水不定性種が22%、陸生珪藻が68%を占める。陸生珪藻の *Humidophila contenta*、*Luticola mutica*、*Amphora montana*、*Hantzschia amphioxys*、流水不定性種の *Nitzschia palea* の出現率がやや高く、好止水性種の *Cyclotella bodanica-radiosa* もやや多い。

4. 珪藻分析から推定される堆積環境

1) S-2134のA、B、Cにおいて、陸生珪藻の占める割合が高く、好止水性種の *Cyclotella bodanica-radiosa*、真止水性種で湖沼沼沢湿地種の *Aulacoseira alpicola-distans* が伴われ、湿った土壌の環境が主要で、浅い水域が伴われることがあった。A、Bでは、特徴的に真・中塩性種（海・汽水性種）で海水藻場指標種の *Coconeis scutellum* が出現し、藻塩や海藻、海産物からもたらされたと考えられ、S-2134は廃棄土坑の可能性が示唆される。そのため出現した湖沼沼沢湿地種も、食用となる水草が利用後投棄されたことに由来する可能性も考えられる。

2) S-4025のA、B、C、D、Eにおいて、*Humidophila contenta*、*Hantzschia amphioxys*、*Luticola mutica* の陸生珪藻が優勢で、流水不定性種が伴われ、上部では真・好止水性種が増加する。湿った土壌の環境が大部分を占め、不安定で曖昧な浅い水域が伴われることもあり、上部では止水の影響を受け水域が伴われることもあった。

3) S-4031のA、B、C、D、Eにおいて、*Humidophila contenta*、*Hantzschia amphioxys*、*Luticola mutica* の陸生珪藻が優勢で、流水不定性種、真・好止水性種が伴われ、湿った土壌の環境が大部分を占め、不安定で曖昧な浅い水域と、止水域が伴われ、Dでは、流水の影響も受ける。概ねS-4025の上部の堆積環境と類似する。

Ⅶ. まとめ

下郡遺跡群第151次調査において出土した土坑、S-2134、S-2256、S-4025、S-4031において花粉分析、寄生虫卵分析、珪藻分析、種実同定、リン・カルシウム分析の自然科学分析を行った。

S-2134では、湿った程度の乾燥した堆積環境が考えられた。珪藻分析から藻塩や海藻など海産物からもたらされた珪藻が出現し、リン・カルシウム分析では含量が多く、人為による成分の増加が考えられ、S-2134は、海藻、貝などの海産物を含むゴミが投棄され分解した廃棄土坑の可能性が考えられた。

S-2256では、花粉、寄生虫卵、種実は検出されず耐乾性の高い陸生珪藻が出現する湿った程度の土坑で、形状などからトイレ遺構が想定されていたが、分析による用途は不明である。

S-4025では、寄生虫卵は検出されないが、Aではリン・カルシウム分析では含量が多く、何らかの人為的要素が加わったと考えられ、骨、ヒトの歯が出土や底部に木製の板が敷かれていることと整合し、墓の蓋然性が高い。

S-4031では、陽当たりのよい比較的乾燥した環境で、周囲にアブラナ科、イネ科などの草本が生育し、土坑は湿った程度の環境であった。リン・カルシウムの含量は低く、寄生虫卵も検出されず、底部に木製の板が敷かれている以外に、土坑の性格を傍証できる成分は検出されず不明であった。

IX. テフラ分析

1. はじめに

テフラとは、溶岩と火山ガス以外の火山噴出物（軽石、細粒火山灰、火砕流）で、調査区内の土層中に認められた軽石様の黄色粒の集中する土壌の分析を行い、それがテフラであるかの検証を行う。

2. 試料

試料は、2区調査区土層断面で「黄色ブロック土」とされた土壌から採取された2-A区（北）、2-A区（南）2点である。黄色ブロック土は、径3～7mm程度の灰黄褐色を呈するほとんど粘土化した軽石が土層中にレンズ状に密集した状態を呈している。

3. 分析方法

黄色ブロック土は、上述した外観と土層断面における産状から、風化した軽石からなる堆積物であると予想され、ここではテフラの検出同定と重鉱物分析および火山ガラスが検出された場合に屈折率の測定を行う。以下に処理方法を述べる。

(1) テフラの検出同定

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。火山ガラスについては、その形態によりバブル型と中間型、軽石型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分であるY字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く延びた繊維束状のものとする。

(2) 重鉱物分析・屈折率測定

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4mm-1/8mmの砂分をポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離、重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。重鉱物同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。

火山ガラスの屈折率の測定は、古澤（1995）のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

第9表 テフラ分析結果

試料名	スコリア	火山ガラス		軽石		備考
	量	量	色調・形態	量	色調・発泡度 最大粒径	
2-A区(北)	—	+	cl・bw, cl・pm	(+)	GYBr・sb 1.0	自形の斜長石や両輝石の鉱物粒、火山岩類
2-A区(南)	—	+	cl・bw, cl・pm	(+)	GYBr・sb 2.5	自形の斜長石や両輝石の鉱物粒、火山岩類

凡例 —:含まれない、(+):きわめて微量、+:微量、++:少量、+++ :中量、+++++:多量、

GYBr:灰黄褐色、

g:良好、sg:やや良好、sb:やや不良、b:不良、最大粒径はmm、

cl:無色透明、br:褐色、bw:バブル型、md:中間型、pm:軽石型、

4. 結果

(1) テフラの検出同定

結果を表5に示す。2点の試料からはともに火山ガラスが微量、軽石が極めて微量検出され、スコリアは認められなかった。火山ガラスは、無色透明のバブル型と軽石型が混在し、軽石は灰黄褐色を呈する発泡や不良の特徴を示す。軽石の最大径は1～2.5mm程度である。

砂分の主体を占める砕屑物は、その多くは自形を呈する斜長石や角閃石の鉱物粒であり、また角礫状の火山岩類である。

(2) 重鉱物分析・屈折率測定

重鉱物分析の結果を表6と図3に示す。2点の試料の重鉱物組成はほぼ同様であり、斜方輝石が多く、70%程度を占め、10～15%程度の単斜輝石と20%程度の不透明鉱物を伴う。

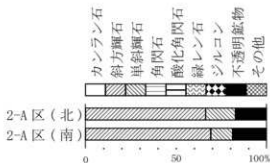
火山ガラスの屈折率を図4に示す。2点の試料は概ね同様の結果を呈する。火山ガラスの主体は、 $n_{1.497-1.501}$ のレンジを示し、 $n_{1.499}$ に明瞭なモードを持つ。これに $n_{1.510-1.514}$ のレンジをもつ高屈折率の火山ガラスが少量混在する。

5. 考察

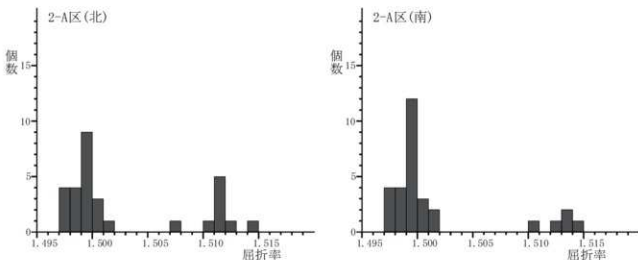
下都遺跡群が立地する大分川の自然堤防は、おそらく後期更新世末から完新世以降に形成された地形であると考えられ、その表層を覆う土壌は、後期更新世末以降に形成されたものである。その土壌中に堆積する黄色ブロック土は後期更新世末以降に堆積したと考えられるが、吉岡ほか(1997)などの地質記載を参照すれば、この時期に大分平野に降下堆積した軽石質テフラはこれまでに認められていない。軽石様の砕屑物がほとんど粘土化していることも考慮すれば、黄色ブロック土を構成する風化軽石は、テフラの降下堆積層で

第10表 重鉱物分析結果

試料名	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑閃石	ジルコン	不透明鉱物	その他	合計
2-A区(北)	0	166	41	0	0	0	0	42	1	250
2-A区(南)	0	173	30	1	1	0	0	44	1	250



第113図 黄色ブロックの重鉱物組成



第114図 火山ガラスの屈折率

はなく、周辺域に堆積するテフラ層の再堆積層である可能性が高いと考えられる。上述した吉岡ほか（1997）によれば、大分平野背後の鶴崎台地南西部の丘陵には前期更新世の堆積層である片島層中には曲火砕流堆積物や米良火砕流堆積物が堆積しており、こうした比較的古い火砕流堆積物から洗い出されてきた軽石が、大分川の自然堤防上に堆積し、黄色ブロック土となった可能性がある。曲火砕流も米良火砕流も両輝石デイサイト質という記載があり、今回の分析で確認された黄色ブロック土の重鉱物組成とも整合する。

なお、試料中から検出された火山ガラスのうち、低屈折率のレンジを構成する火山ガラスは、バブル型を含む形態とその屈折率の値から、3万年前に始良カルデラから噴出した始良Tnテフラ（AT: 町田・新井, 1976; Smith et al., 2013）に由来すると考えられ、少量混在する高屈折率の火山ガラスは、バブル型を含む形態とその値から、7300年前に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤテフラ（K-Ah: 町田・新井, 1978; 2003）に由来すると考えられる。これらのテフラも降下堆積したものではなく、周辺土壌が流されて再堆積した中に含まれていたものであろう。

2区調査区の黄色ブロック土についてテフラ分析を行った結果、3万年前に始良カルデラから噴出した始良Tnテフラ（AT: 町田・新井, 1976; Smith et al., 2013）、7300年前に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤテフラ（K-Ah: 町田・新井, 1978; 2003）に由来すると考えられ、黄色ブロック土を構成する風化軽石は、周辺域に堆積するテフラ層の再堆積層であると考えられた。

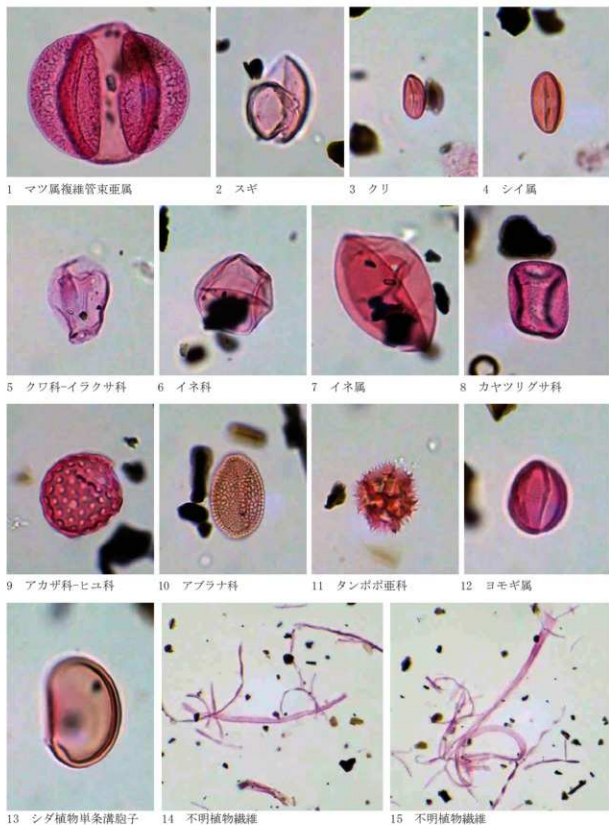
参考文献

- 土質学会編（1979）土質試験法，p. 2-5-1～2-5-23, 4-2-1～4-3-11.
- 金原正明（1999）寄生虫，西田豊弘・松井 章編「考古学と動物学」，同成社，p. 151-158.
- 金原正明・金原正子（1992）花粉分析および寄生虫，奈良国立文化財研究所編「藤原京跡の便所遺構—藤原京7条1坊—」，p. 14-15.
- 金原正明・金原正子（2013）植生と農耕における土壌層分析の実証的研究，日本文化財学会第30回大会研究発表会要旨集，p. 112-113.
- 金原正明・金原正子（2015）堆積物と植物遺体の総合的研究，日本文化財学会第32回大会研究発表会要旨集，p. 146-147.
- 中村 純（1967）「花粉分析」，古今書院，232p.
- 島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態，大阪市立自然科学博物館収蔵目録，5，60p.
- 中村 純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として，第四紀研究，13，p. 187-193.
- 中村 純（1977）稲作とイネ花粉，考古学と自然科学，no. 10，p. 21-30.
- 中村 純（1980）日本産花粉の標徴，大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.
- 金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原，木下正史編「新版古代の日本 第10巻 古代資料研究の方法」，角川書店，p. 248-262.
- 金子清俊・谷口博一（1987）線形動物・扁形動物，医動物学「医動物学 付 実験用動物学 新版臨床検査講座，8」，医歯薬出版，p. 9-134.
- Warnock, P. J. and Reinhard, K. J. (1992) Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. Journal of Archaeological Science, 19, p. 231-245.
- Hustedt, F. (1937-1938) Systematische und ologische Untersuchungen über die Diatomeen Flora von Java, Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch. Hydrobiol., Suppl.

- 15, p. 131-506. Lowe, R.L. (1974) Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. 333p., National Environmental Research Center.
- K. Krammer・H. Lange-Bertalot (1986-1991) Bacillariophyceae, vol. 2, no. 1-no. 4
- Asai, K. & Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, p. 35-47.
- 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用. *東北地理*, 42, p. 73-88.
- 伊藤良永・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. *珪藻学会誌*, 6, p. 23-45.
- 小杉正人 (1986) 陸生珪藻による古環境解析とその意義—わが国への導入とその展望—. *植生史研究*, 第1号, 植生史研究会, p. 29-44.
- 小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. *第四紀研究*, 27, p. 1-20.
- 渡辺仁治 (2005) 淡水珪藻生態図鑑 群集解析に基づく汚濁指数 DAIPo, pH 耐性. 内田老鶴園, 666p.
- 町田 洋・新井房夫, 1976, 広域に分布する火山灰—始良 Tn 火山灰の発見とその意義—. *科学*, 46, 339-347.
- 町田 洋・新井房夫, 1978, 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ—アカホヤ火山灰—. *第四紀研究*, 17, 143-163.
- Smith, V.C., Staff, R.A., Blockley, S.P.E., Ramsey, C.B., Nakagawa, T., Mark, D.F., Takemura, K., Danbara, T., Suigetsu 2006 Project Members, 2013, Identification and correlation of visible tephrae in the Lake Suigetsu SG06 sedimentary archive, Japan: chronostratigraphic markers for synchronizing of east Asian/west Pacific palaeoclimatic records across the last 150 ka. *Quaternary Science Reviews*, 67, 121-137.
- 吉岡敏和・星住英夫・宮崎一博, 1997, 大分地域の地質. 地域地質研究報告 (5 万分の 1 地質図幅), 地質調査所, 65p.
- [作業従事者]
- 分析担当者: 金原正子・金原美奈子・金原裕美子・木寺きみ子
- 文責担当者: 金原正子

(編者補)

第4章については、本書に未掲載の 151 次調査 4 区の内容が含まれている。文章の構成上、別々に報告することが難しかったため、分けずに一括で掲載した。今後刊行予定の報告書において、自然科学分析の内容を踏まえ改めて検討を行いたい。文章中の表記についても、原文を尊重し記述はそのままとした。



※検出箇所

S-2134 C: 2, 6, 12

S-4025 A: 8

S-4025 B: 14, 15

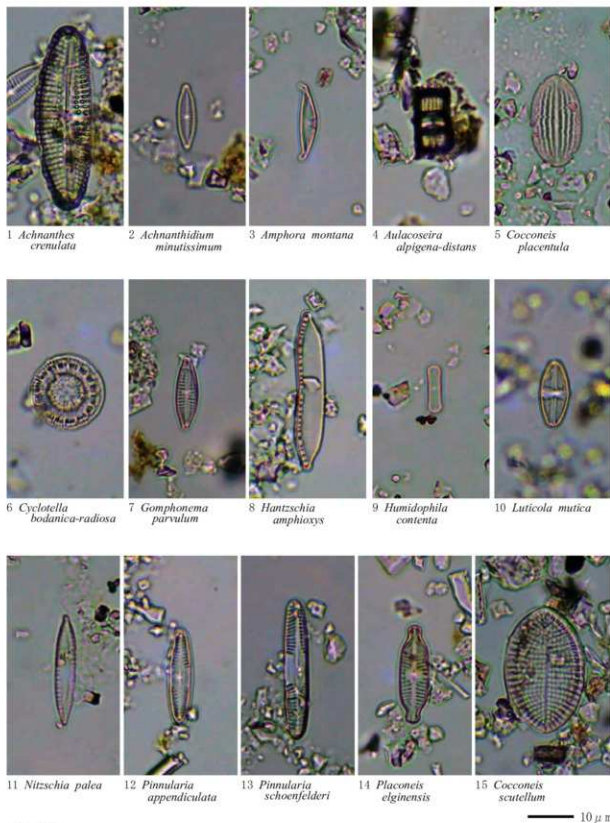
S-4025 C: 13

S-4031 A: 3-5, 7, 9-11

S-4031 B: 1

1-13 ——— 10 μm、14, 15 ——— 10 μm

第115図 分析資料写真(花粉)



奈検出箇所

S-2134 B: 5, 15
S-4025 B: 8, 11-13

S-4025 C: 9, 10
S-4031 D: 1-4, 6, 7, 14

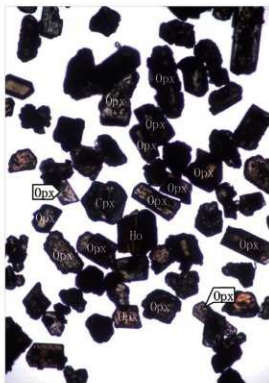
第 116 図 分析資料写真 (珪藻)



1 砂分の状況(2-A区(北))



2 砂分の状況(2-A区(南))



3 重鉱物(2-A区(北))



4 重鉱物(2-A区(南))

Opx: 斜方輝石, Cpx: 単斜輝石, Ho: 角閃石, Op: 不透明鉱物。

2.0mm 0.5mm
1, 2 3, 4

第117図 砂分の状況・重鉱物

第5章 総括

前章までにおいて、都市計画道路庄原佐野線街路改良事業に伴う下部遺跡群の発掘調査で確認された遺構・遺物の概要について報告してきた。本章ではそれらを踏まえ、各調査区における遺構の年代の整理と、遺跡の性格について総括を行う。

(1) 各調査区の成果

第151次調査・1区

本調査区は、現代の宅地開発に伴う建物基礎設置や地盤改良等によって、遺構のほとんどが削平される状況が確認できた。遺物もほとんどなく、表土から数点確認したのみである。検出した遺構の年代的な位置付けは難しく、隣接する120次調査との関係性も明らかにできない。調査区南端部に確認できた砂地の地盤と若干の地形の落込みは旧河道であった可能性を示すものである。

第151次調査・2区

本調査区は、弥生時代中期を中心とする遺構に加え、古代に属する遺物群を確認した。遺構が重複しており、個々の位置付けは難しいものがあるが、確認できた遺構はいずれも弥生時代中期の範疇に収まるものとする。検出した遺構はいずれも弥生時代中期の土坑(151-SK2090などは貯蔵穴としての機能が想定できる)である。削平を受けているため堅穴建物跡を確認することができなかった。151-SX2004や151-SX2039などの遺物集中ブロックにおいては、弥生土器のほか、7～9世紀を中心とする遺物を確認した。坏身坏蓋のセットに加え、甕を中心とした煮炊具、貯蔵具といった基本器種のほか、須恵器円面硯のような古代官衙関連遺跡を特徴づける遺物が出土している。土師器についても、基本的には須恵器の一般器種と同様の形のものが出土している。また、製塩土器も一定量確認しており、いずれも当該期の所産と思われる。

第152次調査・4区

151次調査2区に隣接する本調査区では、同様に弥生時代中期に属する遺構に加え、古代の掘立柱建物を確認した。弥生時代中期の遺構として152-SH4001や152-SK4010を確認した。8世紀中頃～9世紀初頭に位置付けられる152-SB4075は規模の差はあるが90次調査SB008やSB294に柱穴構造や埋土が類似しており、それらとの関連性が想定できる。

(2) おわりに

本書に掲載できなかった残りの調査区(150次調査、151次調査3・4区、152次調査1～3区)については、今後2箇年で継続して報告する予定である。残りの調査区においても遺構・遺物の量が充実しており、下部遺跡群の歴史的な評価をさらに深めることのできる資料になると期待している。

今回確認した遺物群の編年の位置及びそれらに基づく遺跡の評価については、今後報告する資料と合わせて検討が必要であると判断したため、本書では行わず事実報告のみに留めた。とくに、古代の土器群については細かな年代観が確立されており、遺跡群内のみならず大分平野・豊後地域での広い視点からの検討が必要となろう。不十分な記述となった箇所もあるが、遺跡の様相をより明らかにできるよう、今後も資料整理とその検討を進めていきたい。

第5章 総括

参考・引用文献一覧（第2章、第3章、第5章）

○下郡道跡群に関する報告書

坪根伸也・井口あけみ・宮成美恵編 2002『下郡道跡群Ⅰ』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書40 大分市教育委員会

坪根伸也・樽田智美編 2003『下郡道跡群Ⅱ』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書48 大分市教育委員会

坪根伸也・梅本信宏編 2005『下郡道跡群Ⅲ』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書61 大分市教育委員会

坪根伸也・梅本信宏編 2006『下郡道跡群Ⅳ』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書68 大分市教育委員会

坪根伸也・樽田智美編 2007『下郡道跡群Ⅴ』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書76 大分市教育委員会

樽田智美・河野史郎・坪根伸也 2008『下郡道跡群Ⅵ』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書85 大分市教育委員会

樽田智美・坪根伸也編 2009『下郡道跡群Ⅶ』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書92 大分市教育委員会

樽田智美・坪根伸也ほか編 2010『下郡道跡群Ⅷ』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書100 大分市教育委員会

石川ゆかり・高島豊編 2010『大分市埋蔵文化財調査概要報告2010』大分市教育委員会

松本晴美ほか編 2011『大分市埋蔵文化財調査概要報告2011』大分市教育委員会

五十川雄也編 2011『下郡道跡群』大分市埋蔵文化財発掘調査報告108 大分市教育委員会

小野綾夏編 2014『大分市埋蔵文化財調査概要報告2013』大分市教育委員会

米倉加奈絵・荒木伴世編 2019『大分市埋蔵文化財調査概要報告2018』大分市教育委員会

高橋信武編 1989『下郡桑苗道跡』大分県文化財調査報告書80 大分県教育委員会

高橋信武編 1992『下郡桑苗道跡Ⅱ』大分県文化財調査報告書89 大分県教育委員会

○その他

池邊千太郎・長直信・羽田野裕之編 2010『城原・里道跡』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書101 大分市教育委員会

石田智子 2015「各地の弥生土器及び並行期土器群の研究 九州」『考古調査ハンドブック12』ニュー・サイエンス社

国土院 2010『土地条件調査解説書「大分地区」』

小柳和宏編 2018『雄城台道跡』大分県立埋蔵文化財センター調査報告書19 大分県立埋蔵文化財センター

高島豊編 2006『南金池道跡』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書64 大分市教育委員会

中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真備社

長直信 2016「豊前・豊後の官衙・集落道跡と土器様相」『官衙・集落と土器2』奈良文化財研究所

羽島幸一 2013「瀬戸内の製塩と流通について」『塩の生産・流通と官衙・集落』奈良文化財研究所

松浦憲治編 2020「羽田道跡5」大分市埋蔵文化財発掘調査報告書162 大分市教育委員会

遺物觀察表

第11表 遺物観察表1 (土器・陶磁器)

調査番号	遺物番号	品名	器種	法 量 (cm)			文様・図柄	色 調	胎 土			備 考
				口 径	底 径	高 径			角 閃 石	長 石	石 質	
21	5	980003	土師器	甕	(25.8)	3.8×φ	(外面) ココナデ・ナデ・ハナ (内面) ココナデ・ナデ	淡褐色	少	多	少	
	6	980003	土師器	甕	(13.2)	4.2	8.0	(外面) 同前ナデ・コウロ切縁上 (内面) 同前ナデ・ミヅギ	褐色	多	多	内面：スス付着
	7	980003	土師器	杯		3.2×φ	(16.8)	(外面) 同前ナデ (内面) ミヅギ	黄褐色	多	少	
	8	980003	土師器	杯		1.6×φ	(8.8)	(外面) 同前ナデ・ミコナデ (内面) ミヅギ・同前ナデ	褐色	多	少	
	9	980003	磁器	青磁碗		2.8×φ	(7.0)	(外面) 施釉 (内面) 施釉	オリーブ灰			
	10	980003	土師器	製仏土器		4.9×φ		(外面) ナデ (内面) ナデ・磨面	褐色	少	多	少
	12	980002	赤土器	甕		1.9×φ		(外面) 黒目斑・ナデ・浮文 (内面) ナデ・ミコナデ	にじみ・褐色	少	少	少
	13	980002	赤土器	甕		2.7×φ		(外面) 施釉・乾変 (内面) ナデ・ミコナデ	にじみ・褐色	少	少	下縁式土器
	14	980002	赤土器	甕		4.4×φ		(外面) ナデ (内面) ミヅギ・ミコナデ	にじみ・褐色	少	少	下縁式土器
	15	980002	赤土器	甕		3.2×φ		(外面) 上長ナデ・タタハク (内面) ミコナデ・ナデ	にじみ・黄褐色	少	少	
22	16	980002	赤土器	甕		3.2×φ		(外面) 上長ナデ・タタハク (内面) 上長ナデ・ナデ	にじみ・黄褐色	少	少	
	17	980002	赤土器	甕		4.4×φ		(外面) ココナデ・ハナミギ (内面) ココナデ・ナデ	にじみ・黄褐色	少	少	
	18	980002	赤土器	甕		4.3×φ		(外面) ココナデ・黒目斑 (内面) ココナデ	にじみ・黄褐色	多	少	下縁式土器
	19	980002	土師器	甕	(13.4)	6.8×φ		(外面) タタハク・ミヅギ・ココナデ (内面) ココナデ・ミコナデ・ナデ・ミコナデ	にじみ・黄褐色	多	少	
	20	980002	赤土器	所置		2.1×φ		(外面) 同前ナデ・同前ハナミギ (内面) 同前ナデ	灰白色			
	21	980002	赤土器	甕		4.3×φ		(外面) ココナデ (内面) ココナデ	灰白色			
	22	980002	赤土器	甕		3.3×φ		(外面) ナデ・深淵 (内面) ナデ	黄褐色			
	23	980002	土師器	杯		2.1×φ	(8.8)	(外面) 同前ナデ・同前ハナミギ (内面) 同前ナデ・同前ナデ	褐色	少	少	
	24	980002	土師器	杯		1.8×φ		(外面) 同前ナデ・同前ハナミギ (内面) 同前ナデ	にじみ・黄褐色	少		
	25	980002	土師器	甕		4.3×φ		(外面) ココナデ・ナデ (内面) ココナデ・ナデ	淡黄褐色	少	少	内面：スス付着
	27	980002	磁器	白磁碗		2.5×φ	4.8	(外面) 施釉 (内面) 施釉	灰白色			
	28	980002	陶器	磁鉢		3.8×φ		(外面) 同前ナデ (内面) 同前ナデ	黄褐色			
	29	980002	陶器	鉢		3.4×φ		(外面) ミヅギ (内面) ココナデ・ハナ・ミコナデ	にじみ・褐色	少	少	
24	31	982122	赤土器	甕		1.6×φ		(外面) 同前ナデ (内面) 同前ナデ	淡黄褐色			
	32	982122	土師器	甕		2.9×φ		(外面) 同前ナデ (内面) 同前ナデ・コウロ切縁ミヅギ	黄褐色			
	33	982122	土師器	蓋		1.3×φ		(外面) ココナデ (内面) ココナデ	淡褐色	多	多	
	34	982122	土師器	蓋		1.2×φ		(外面) ココナデ (内面) ココナデ	淡明褐色	少	少	
	35	982122	土師器	杯		1.3×φ		(外面) 同前ナデ・ミヅギ・同前ハナミギ (内面) 同前ナデ・ミヅギ	褐色	少	少	
	36	982122	土師器	杯		2.4×φ		(外面) 同前ナデ・ナデ (内面) 同前ナデ・同前ハナミギ	黄褐色			
	37	982122	土師器	杯		1.4×φ	(8.8)	(外面) 同前ハナミギ・同前ハナミギ (内面) 同前ナデ・ミヅギ	褐色			
	38	982122	土師器	杯		1.7×φ		(外面) 同前ナデ・黒目斑 (内面) 同前ナデ	黄褐色	少	少	少
	39	982122	土師器	杯		1.8×φ		(外面) ナデ (内面) ナデ	黄褐色	少	少	
	40	982122	土師器	甕		3.4×φ		(外面) ナデ (内面) 上長ナデ	褐色	少	少	磨面
	41	982122	赤土器	円筒碗		1.8×φ		(外面) 同前ナデ (内面) 同前ナデ・ミヅギ	灰褐色			断面径 7.0cm
	42	982122	磁器	白磁碗	(17.8)	4.7×φ		(外面) 施釉・磨面・縁にあり (内面) 施釉	灰褐色			
	43	982122	磁器	青磁碗		2.2×φ	(8.2)	(外面) 施釉・磨面 (内面) 施釉	透明釉			
	44	982122	磁器	青磁碗		2.4×φ	8.0	(外面) 施釉・磨面 (内面) 施釉	オリーブ色			
	45	982122	磁器	青磁碗		3.2×φ	(15.8)	(外面) 施釉・磨面 (内面) 施釉	灰オリーブ色			
	46	982122	磁器	白磁碗		3.3×φ	(8.4)	(外面) 施釉・磨面 (内面) 施釉	灰白色			内面：釉上付あり
38	47	843001	土師器	大甕		26.4×φ	26.7	(外面) ナデ・ココナデ (内面) ココナデ・ナデ・ミコナデ	褐色	少	少	

第12表 遺物観察表2 (土器・陶磁器)

調査番号	遺物番号	品名	器種	法 量 (cm)			文様・図案	色 調	胎 土		備 考
				口 径	底 径	高 径			角 閃 石	石 質	
36	582012	煎茶器	壺	5.8+ α			(外面) ココナデ・輪子合ナメキ (内面) ココナデ	黄褐色	少	多	頸部径: (12.8)
	582012	煎茶器	紀平	5.2+ α			(外面) ナデ (内面) 紙心行文	灰青色	少	多	少
	582021	養生土器	甕	7.6+ α			(外面) ココナデ・扇付装束 (内面) ココナデ・月形唐文	黄褐色	少	多	
	582021	養生土器	甕	6.2+ α			(外面) 裏面: 唐文・ココナデ・タタ方向のハキ (内面) ナデ・ココナデのハキ・月形唐文	黄褐色	少	少	
37	582021	養生土器	甕	(36.2)	5.1+ α		(外面) ココナデ・ハキ・唐文 (内面) ココナデ	黄褐色～褐色	多	多	腹面: 口縁の一部・外面: 丹塗あり
	582021	養生土器	甕		5.8+ α		(外面) ココナデ・ナメキ方向のハキ (内面) ココナデ・ココナデのハキ	にじみ・褐色～灰褐色	少	少	
	582021	養生土器	広口甕		9.0+ α		(外面) ナデ～ハキミギキ (内面) ココナデ・ナデ	黄褐色	多	多	
	582021	養生土器	甕	32.6+ α	8.8		(外面) ココナデ・ハキ装束ミギキ・装束ハキ (内面) ココナデ・タタ方向のハキ・上具ナデ	にじみ・褐色～黄褐色	多	多	最大胴部径: (37.5)
38	582021	養生土器	甕	6.2+ α			(外面) ココナデ (内面) ココナデ	褐色	少	多	
	582021	養生土器	甕	2.9+ α			(外面) ココナデ (内面) ココナデ	にじみ・褐色	少	多	
	582021	養生土器	甕	5.0+ α			(外面) ココナデ・ナメキ方向のハキ (内面) ココナデ	黄褐色	少	多	
	582021	養生土器	甕	3.0+ α			(外面) ココナデ～ハキミギキ (内面) ココナデ～ハキミギキ	黄褐色	少	多	
	582021	養生土器	甕	6.9+ α			(外面) ココナデ・扇付装束・ナメキ方向のハキ (内面) ココナデ・ナデ	褐色	少	多	
	582021	養生土器	甕	10.7+ α			(外面) ココナデ・扇付装束・ナデ・ミギキ (内面) ココナデ・ココナデのハキ	黄褐色	少	多	内面: 丹塗あり
	582021	養生土器	甕	(22.6)	3.8+ α		(外面) ナデ (内面) ナデ	黄褐色	少	多	
	582021	養生土器	甕	(23.4)	10.0+ α		(外面) ナデ・ココナデ・ハキミギキ (内面) ココナデ・ココナデ	黄褐色	少	多	
	582021	養生土器	甕	(26.0)	8.2+ α		(外面) ココナデ・タタ方向のハキナデ (内面) ココナデ・タタ方向のハキナデ	黄褐色	少	多	
	582021	養生土器	甕	(27.0)	9.9+ α		(外面) タタハキ・ココナデ (内面) ココナデ・ナデ・ココナデ	黄褐色	少	多	
	582021	養生土器	甕	5.9+ α			(外面) ココナデ・扇付装束・ナメキハキ (内面) ココナデ・ユビオササキ	にじみ・褐色	少	多	下城式土器
	582021	養生土器	甕	5.7+ α			(外面) タタハキ・扇付装束・ココナデ (内面) ココナデ・上具ナデ	黄褐色	少	多	下城式土器
39	582021	養生土器	高杯	9.4+ α			(外面) ミギキ (内面) ココナデ・縦目唐文	黄褐色	少	多	最大径: (6.6)
	582021	養生土器	甕	5.1+ α			(外面) タタ方向のハキ (内面) ナデ・ユビオササキ	黄褐色	少	多	
	582021	養生土器	底皿	6.8+ α	(7.0)		(外面) ココナデ (内面) ココナデ・縦目唐文・縁合装	にじみ・黄褐色	少	多	
	582021	養生土器	底皿	8.1+ α	(6.0)		(外面) タタ方向のハキ・ココナデ・ナデ (内面) ナデ	にじみ・褐色	少	多	
	582021	煎茶器	蓋	3.2+ α			(外面) 煎茶ナデ (内面) 煎茶ナデ	黄褐色	少	多	
	582021	煎茶器	年	1.8+ α			(外面) 煎茶ナデ (内面) 煎茶ナデ	黄褐色	少	多	
	582021	土師器	底皿	2.3+ α	(6.0)		(外面) 煎茶ナデ・煎茶ハキ切縁ミズナデ (内面) 煎茶ナデ	褐色	少	多	
	582021	煎茶器	杯	(13.8)	6.2	(16.9)	(外面) 煎茶ナデ・底付装束のナデ (内面) 煎茶ナデ・ナデ	灰青色	少	多	
	582021	煎茶器	杯小	2.6+ α			(外面) 煎茶ナデ (内面) 煎茶ナデ	灰青色	少	多	内面: 自然釉付着
	582024	養生土器	高杯	(27.8)	3.0+ α		(外面) ナデ・縁部 (内面) ミギキ縁丹塗り・ナデ	黄褐色	多	多	内面: 丹塗あり
	582024	養生土器	高杯	(25.6)	7.7+ α		(外面) ナデ・縁部 (内面) 煎茶ナデ・ミギキナデ	褐色～赤色	多	多	内面: 丹塗あり
	582024	養生土器	甕	6.9+ α			(外面) 裏面: 文様ナデ (内面) ナデ・縁部	黄褐色	多	多	下城式土器
40	582024	養生土器	高杯	7.0+ α	(8.6)		(外面) ココナデ・装束 (内面) ナデ	黄褐色	多	多	
	582024	養生土器	底皿	6.0+ α	6.0		(外面) ハキ・ココナデ (内面) ミギキ・ナデ・ユビオササキ	褐色	多	多	少
	582027	土師器	底皿	14.9+ α	8.0		(外面) 煎茶ナデ (内面) 煎茶ナデ・上具・ユビオササキ	黄褐色	多	多	
	582027	養生土器	甕	6.2+ α			(外面) ナデ・扇付装束・扇付装束 (内面) ナデ	黄褐色～にじみ・褐色	多	多	下城式土器
41	582031	土師器	杯	12.3	3.0	(5.0)	(外面) ココナデ・煎茶ハキ切縁ミズナデ (内面) ミギキナデ	黄褐色	少	多	
	582040	土師器	甕	(26.1)	17.7+ α		(外面) ココナデ・ハキ (内面) ハキ	黄褐色～にじみ・褐色	多	多	内面: スス付着
42	582040	養生土器	甕	7.6+ α			(外面) ナデ・ココナデ (内面) ナデ・ココナデ	黄褐色	多	多	内面: 下方にスス付着
	582040	養生土器	底皿	5.8+ α	3.9		(外面) ハキ・ユビオササキ (内面) ナデ	にじみ・褐色	少	多	内面: スス付着

第13表 遺物観察表3 (土器・陶磁器)

調査 番号	遺物 番号	品名	器 種	法 量 (cm)			文様・調整	色 調	胎 土		備 考
				口 径	底 径	高 度			角 閃 石	石 質	
41	91	SK200	土師器小 底片			7.6+α	(外面) ベタ塗のナデ (内面) ココナデ・ナデ	黄褐色	少	多	
	95	SK204	赤生土器 壺口			8.2+α	(外面) ココナデ・ナデ (内面) ナデ	黄褐色	多	多	フタ式土器
	96	SK204	赤生土器 紀手			3.8+α	(外面) ナデ・穿孔 (内面) ココナデ	灰色			穿孔：径40
	97	SK204	土師器 底	(13.8)	1.43	(10.3)	(外面) ココナデ・ベタ塗 (内面) ココナデ	褐色～にじみ褐色	少	少	
	98	SK204	土師器 腹片			3.1+α	(外面) ココナデ	にじみ黄褐色	少	少	最大断面径：6.0、穿孔径：底面 1.0、下底0.7
	99	SK204	赤生土器 壺			3.7+α	(外面) ココナデ・ナデ・調整 (内面) ココナデ	にじみ褐色	少	少	
	100	SK204	赤生土器 壺			4.9+α	(外面) ココナデ (内面) ココナデ	灰白色	少	少	
	101	SK204	赤生土器 壺			3.6+α	(外面) 定規・調整ナデ (内面) 調整ナデ・底片 (青褐色)	灰色			外面：自然剥け
	102	SK204	土師器 紀手			7.3+α	(外面) ナデ・ミビオサエ (内面) ナデ	にじみ黄褐色	多	多	
	103	SK204	赤生土器 片	12.1	4.1	8.4	(外面) 調整ナデ・ベタ塗 (内面) 調整ナデ・ナデ	灰色			
42	104	SK204	土師器 片	14.2	4.3		(外面) ココナデ (内面) ココナデ・ナデ	褐色	少	少	
	105	SK204	土師器 片			2.1+α	(外面) 調整ナデ・ベタ塗 (内面) ナデ	褐色	少	多	
	106	SK204	土師器 割版土器			4.2+α	(外面) ナデ (内面) 紀手	黄褐色		多	
	107	SK204	土師器 壺			12.2+α	(外面) ココナデ・ナデ (内面) ココナデ・ナメ方面のハタ	黄褐色	少	少	
	108	SK200	赤生土器 壺			(18.0)	(外面) ココナデ・ナデ・ナメ方面のハタ (内面) ナデ	灰褐色	少	少	フタ式土器
	109	SK200	赤生土器 壺			14.0+α	(外面) ココナデ・腹片調整・ナデ (内面) ナデ・ミビオサエ	灰褐色	少	多	フタ式土器
	110	SK200	赤生土器 壺			3.8+α	(外面) ココナデ・腹片調整・調整 (内面) ココナデ・ミビオサエ	黄褐色	多	多	フタ式土器
	111	SK200	赤生土器 壺			3.7+α	(外面) ベタ塗・腹片調整・調整 (内面) ベタ塗	褐色	多	多	フタ式土器
	112	SK200	赤生土器 壺			2.3+α	(外面) 腹片調整・調整 (内面) ナデ	黄褐色	多	多	フタ式土器
	113	SK200	赤生土器 底片			3.9+α	(外面) ナメ方面・ナデ (内面) ミビオサエ・ナデ	黄褐色	多	多	
43	114	SK213	赤生土器 甕口縁			6.9+α	(外面) ナデ・ココナデ (内面) ナデ・ココナデ	黄褐色		多	
	115	SK213	赤生土器 甕口縁			4.3+α	(外面) ナメ方面・ココナデ (内面) ナデ・ココナデ	黄褐色	多	多	
	116	SK213	赤生土器 甕口縁			2.6+α	(外面) 調整調整・ナメ方面・ココナデ (内面) ナデ	黄褐色	多	多	フタ式土器
	117	SK213	赤生土器 甕口縁			8.7+α	(外面) 調整調整・ナメ方面・ココナデ (内面) ナメ方面・ココナデ	黄褐色	少	多	フタ式土器
	118	SK213	土師器 割版土器			4.0+α	(外面) ナメ方面・ココナデ (内面) ナデ	褐色	少	多	
	119	SK213	赤生土器 底片			4.2+α	(外面) ナメ方面・ココナデ (内面) ナデ	黄褐色～黄褐色	少	多	外面：黒色あり
	120	SK210	赤生土器 壺			3.4+α	(外面) 調整調整・ナデ・ココナデ (内面) ナメ方面・ココナデ	黄褐色	多	多	フタ式土器
	121	SK210	赤生土器 壺			1.2+α	(外面) ベタ塗・ナデ・ココナデ・調整・底片 (内面) ナデ・ココナデ	黄褐色	少	多	
	122	SK210	赤生土器 壺			3.2+α	(外面) ココナデ (内面) ココナデ	灰白色	少	少	フタ式土器
	123	SK210	赤生土器 赤銅器			2.0+α	(外面) 調整調整 (内面) ナデ	黄褐色	少	少	フタ式土器
44	124	SK210	赤生土器 赤銅器			3.4+α	(外面) ミビオサエ・調整調整 (内面) ミビオサエ	にじみ黄褐色	少	少	フタ式土器
	125	SK210	赤生土器 赤銅器			3.5+α	(外面) ナメ方面・調整調整 (内面) ナメ方面・ココナデ	褐色	少	少	フタ式土器
	126	SK212	赤生土器 底片			4.7+α	(外面) ナメ方面・ココナデ (内面) ナメ方面・ココナデ	褐色	少	少	
	128	SK222	赤生土器 壺			4.0+α	(外面) ココナデ・ナメ方面 (内面) ナメ方面	黄褐色	少	少	
	129	SK222	赤生土器 鉢	(12.0)	6.1+α		(外面) ココナデ・調整調整 (内面) ナメ方面・ココナデ	黄褐色	多	多	
	130	SK222	赤生土器 壺			2.4+α	(外面) ナメ方面・調整調整 (内面) 調整調整	灰色	少		
	131	SK222	土師器 片	(13.0)	3.7	8.4	(外面) ナメ方面・調整調整 (内面) ナメ方面・調整調整	黄褐色	少	少	
	132	SK222	赤生土器 壺			1.1+α	(外面) ココナデ (内面) ココナデ	灰褐色			
	133	SK222	土師器 片	(14.1)	4.3	(16.4)	(外面) 調整調整・ナデ (内面) ナデ	褐色～にじみ褐色	少	少	
	134	SK222	土師器 紀手			3.5+α	(外面) ナデ・ミビオサエ (内面) ナデ	にじみ褐色	多	少	

第14表 遺物観察表4 (土器・陶磁器)

調査番号	遺物番号	品名	器種	法 量 (cm)			文様・図案	色 調	土 質		備 考
				口 径	高	底径			角 石	石 質	
63	135	982256	赤土土器	甕	(20.0)	3.8 × α	(外面) ココナザ・タワハタ・三角文様 (内面) ハタ・ミギキ・工芸ナザ	にじい・赤褐色	多		
	136	982256	赤土土器	甕	(16.0)	2.4 × α	(外面) ココナザ (内面) ココナザ・ミギキ	暗赤褐色	少		
	137	982256	赤土土器	甕		6.2 × α	(外面) タワハタ・肩目文様・ココナザ (内面) ナザ・工芸ナザ・ミビキナザ	明褐色～赤褐色	少	少	
	138	982256	赤土土器	甕	(21.0)	12.7 × α	(外面) ココナザ・ナザ・ミビキナザ (内面) ココナザ・ナザ・ミビキナザ	にじい・褐色	少	少	
	139	982256	赤土土器	甕		4.8 × α	(外面) タワハタ・ナザ (内面) ナザ	にじい・黄褐色	少	少	
	140	982256	赤土土器	甕		1.9 × α	(外面) ミギキ・ココナザ (内面) ナザ・ミギキ	褐色	少	少	
	142	982258	赤土土器	高杯		4.5 × α	(外面) 新羅により・ココナザ・竹文 (内面) ココナザ	淡褐色	多	少	内面：スス付着
	143	982258	赤土土器	高杯		4.0 × α	(外面) ココナザ (内面) ココナザ・ナザ	淡黄褐色	多		
64	144	982258	赤土土器	甕		4.2 × α	(外面) ココナザ・肩目文様・タワハタ (内面) ココナザ・工芸ナザ	褐色	少	少	
	145	982258	赤土土器	甕		2.9 × α	(外面) ナザ・肩目文様・ナメタタタハタ (内面) ナザ・肩目文様・ナメタタタハタ	にじい・褐色	少	少	多
	146	982258	赤土土器	甕		3.7 × α	(外面) タワハタ・ココナザ・肩目文様 (内面) ナザ・ミギキ	黄褐色	多	多	下城式土器
	147	982258	赤土土器	甕		4.9 × α	(外面) ココナザ・2本の肩目文様 (内面) ココナザ・ナザ	にじい・黄褐色	少	少	少
	148	982258	赤土土器	甕		2.7 × α	(外面) 工芸ナザ (内面) 工芸ナザ・ハラタタタ	褐色	少	少	
	149	982258	土師器	甕	(21.0)	9.1 × α	(外面) ココナザ・ナメタタタハタ・ミギキ (内面) ココナザ・工芸ナザ	にじい・黄褐色～褐色	少	少	
	150	982258	土師器	甕		7.9 × α	(外面) ハタ・ミギキ (内面) 絞リ紙	にじい・褐色	少	少	外面：赤色顔料付
	151	982258	土師器	甕		5.5 × α	(外面) ハタ・ミギキ・新羅により (内面) 絞リ紙	淡黄褐色	少	少	
	152	982258	赤土土器	甕		3.1 × α	(外面) タワハタ・ココナザ (内面) ココナザ	淡黄褐色	多	多	
	153	982258	赤土土器	甕		2.3 × α	(外面) タワハタ・ココナザ (内面) ハラタタ・ミギキ・新羅	褐色	少	少	少
	160	932001	赤土土器	1口鉢		1.0 × α	(外面) ココナザ・文様 (内面) ハタ・ココナザ	にじい・褐色	少	少	少
65	161	932001	赤土土器	1口鉢		0.8 × α	(外面) ナザ・文様・ナザ (内面) ナザ・高文・新羅文	明赤褐色	少	多	少
	162	932001	赤土土器	1口鉢	(26.0)	6.1 × α	(外面) ココナザ・ナザ・タワハタ (内面) ナザ・ココナザ・工芸ナザ・縁文	淡明褐色	多	多	外面：一段内張り 厚さ：0.6
	163	932001	赤土土器	甕	(17.0)	3.8 × α	(外面) ココナザ・ナメタタタハタ・竹文 (内面) ココナザ	にじい・褐色～褐色	少	少	
	164	932001	赤土土器	甕		4.9 × α	(外面) タワハタ・ココナザ・新羅 (内面) ナザ	にじい・褐色	多	少	
	165	932001	赤土土器	甕		6.7 × α	(外面) 高文・ナザ (内面) ナザ	灰白色	多	少	少
	166	932001	赤土土器	甕		3.5 × α	(外面) ナザ・高文 (内面) ナザ	暗灰褐色	多	多	
	167	932001	赤土土器	甕		7.1 × α	(外面) ナザ・高文・ナザ (内面) ナザ	灰褐色	多	少	
	168	932001	赤土土器	甕		1.5 × α	(外面) 竹文・ナザ・タワハタ・ココナザ (内面) ココナザ・竹文	灰褐色	多	多	
	169	932001	赤土土器	甕		3.5 × α	(外面) ナザ・高文 (内面) 新羅	暗褐色	多	多	下城式土器
	170	932001	赤土土器	甕		3.2 × α	(外面) ナザ・高文 (内面) ナザ	にじい・赤褐色	少	少	
	171	932001	赤土土器	甕		3.6 × α	(外面) 工芸ナザ・新羅 (内面) ミギキ	にじい・褐色	少	少	
	172	932001	赤土土器	甕		2.7 × α	(外面) ナザ・高文 (内面) ナザ	にじい・褐色	少	少	外面：赤色顔料
	173	932001	赤土土器	甕		4.1 × α	(外面) ナザ・高文 (内面) ナザ	褐色	少	多	
	174	932001	赤土土器	甕		4.8 × α	(外面) タワハタ・高文 (内面) ナザ	淡黄褐色	少		
	175	932001	赤土土器	甕		4.0 × α	(外面) 高文 (内面) ナザ	灰褐色	少	少	
	176	932001	赤土土器	甕		3.0 × α	(外面) ハタ・高文 (内面) 新羅	淡褐色	多	多	下城式土器
	177	932001	赤土土器	甕		12.0 × α	(外面) 高文・ナザ (内面) ナザ	暗灰色	少	少	
	178	932001	赤土土器	甕	(21.0)	7.2 × α	(外面) ココナザ・ミギキ・ココナザ (内面) ココナザ・ミギキ・ココナザ	にじい・褐色	多	多	輪郭部が破損
	179	932001	赤土土器	甕	(26.0)	6.1 × α	(外面) ココナザ・ナザ・タワハタ (内面) ナザ・ココナザ・工芸ナザ・縁文	淡明褐色	多	多	外面：一段内張り 厚さ：0.6
	180	932001	赤土土器	甕		4.9 × α	(外面) ナザ・ココナザ (内面) ミビキナザ・ナザ・ココナザ	黄褐色	少	多	新羅：(16.2)
	181	932001	赤土土器	甕		4.5 × α	(外面) ココナザ・三角文様 (内面) ナザ・ミビキナザ	にじい・黄褐色	少	少	外面：厚さあり

第15表 遺物観察表5 (土器・陶磁器)

調査番号	遺物番号	品名	器種	法 量 (cm)			文様・図案	色 調	胎 土		備 考
				口 径	器 高	底 径			角 閃 石	石 質	
69	182	332004	赤土土器	甕	4.1* a		(外面) ココナデ・ハク (内面) ココナデ	にじい・褐色	少	少	
	183	332004	赤土土器	甕	7.2* a		(外面) ナデ・ハク (内面) ナデ	灰白色	多	少	内面：スス・付着あり
	184	332001	赤土土器	甕	6.2* a		(外面) ココナデ・ハク (内面) ココナデ	にじい・黄褐色	多	少	
	185	332004	赤土土器	甕	7.6* a		(外面) ココナデ・タテ方向のハク (内面) ココナデ・ナデ	灰黄褐色	多	多	内面：スス付着
	186	332004	赤土土器	甕	10.0* a		(外面) ココナデ・タテハク (内面) ココナデ・ナデ	にじい・褐色	少	少	
	187	332004	赤土土器	甕	12.6.2 11.2* a		(外面) ヘラタビ・タテハク・ココナデ 1長ナデ (内面) ココナデ・ナデ	黄褐色	多	多	
	188	332004	赤土土器	甕	7.7* a		(外面) 2本の波線・タテ方向のハク (内面) ココナデ・ナデ	黄褐色	少	少	
	189	332004	赤土土器	甕	6.7* a		(外面) ココナデ・タテ方向のハク (内面) ココナデ・ナデ	にじい・黄褐色	少	少	
	190	332004	赤土土器	甕	12.6.2 6.1* a		(外面) ココナデ・ナデ (内面) ココナデ・ナデ	黄褐色	多	少	
	191	332004	赤土土器	甕	12.2 26.6* a		(外面) ココナデ・ハク (内面) ココナデ・ナデ	黄褐色	多	多	少
	192	332004	赤土土器	甕	7.2* a		(外面) ナデ・ココナデ (内面) ナデ・ココナデ	黄褐色	少	多	
	193	332004	赤土土器	甕	5.0* a (底.4)		(外面) ハク・ココナデ (内面) 土黄褐色ナデ・ユビオオス	にじい・黄褐色	多	少	
	194	332004	赤土土器	甕	12.1* a		(外面) ヘラタビ・胎付文様 (内面) ナメ方向のヘラタビ	灰黄褐色	多		
	195	332004	赤土土器	甕	3.4* a		(外面) ココナデ・胎付文様・タテ方向のハク (内面) ココナデ	黄褐色	少	少	下地式土器
	196	332004	赤土土器	甕	7.1* a		(外面) 一部胎付文様・胎付文様・ナデ (内面) ナデ	黄褐色	多	多	下地式土器
	197	332004	赤土土器	甕	9.5* a		(外面) ココナデ・胎付文様・ナデ (内面) ナデ	灰褐色	少	少	
	198	332004	赤土土器	甕	7.6* a		(外面) ココナデ・タテ方向のハク (内面) ココナデ・ナデ	灰黄褐色	多	多	内面：スス付着
	199	332004	赤土土器	甕	12.6.2 10.2* a		(外面) ココナデ・胎付文様・タテ方向のハク (内面) ナデ・ココナデ	灰白色	多	少	
70	200	332004	赤土土器	甕	12.6.2 5.3* a		(外面) ココナデ・胎付文様・タテ方向のハク (内面) ココナデ・ユビオオス	黄褐色	少	少	下地式土器
	201	332004	赤土土器	甕	5.8* a		(外面) タテハク・ココナデ・胎付文様 (内面) ココナデ・ココナデ	黄褐色	少	多	下地式土器
	202	332004	赤土土器	甕	6.3* a		(外面) ココナデ・胎付文様・ナメ方向のハク (内面) ココナデ	にじい・黄褐色	少	少	下地式土器
	203	332004	赤土土器	甕	6.0* a		(外面) ココナデ・胎付文様・ハク・胎線 (内面) ココナデ・ハク	にじい・褐色	少	少	下地式土器
	204	332004	赤土土器	甕	12.4.4 8.5* a		(外面) ココナデ・胎付文様・タテ方向のハク (内面) ナデ・ココナデ	にじい・褐色～灰褐色	多	少	
	205	332004	赤土土器	甕	6.5* a		(外面) 胎付文様・ココナデ・ハク (内面) ココナデ	にじい・黄褐色	少	少	下地式土器
	206	332004	赤土土器	甕	7.8* a		(外面) ナデ・胎付文様・胎付文様・ハク (内面) ナデ	灰褐色	多	多	
	207	332004	赤土土器	甕	12.6.2 16.7* a		(外面) ココナデ・胎付文様・ユビオオス (内面) ココナデ・ナデ・ユビオオス	にじい・黄褐色	少	少	
	208	332001	赤土土器	甕	11.3* a		(外面) タテハク・ココナデ・胎付文様 (内面) ナデ・ココナデ	黄褐色	多	少	
	209	332001	赤土土器	甕	13.0.8 13.2* a		(外面) タテハク・胎付文様 (内面) ナデ・ココナデ・ユビオオス	にじい・褐色	多	少	
71	210	332004	赤土土器	甕	13.2 7.1* a		(外面) タテハク・ココナデ・胎付文様 (内面) ココナデ・ナデ	黄褐色	少	多	内面：胎線あり 下地式土器
	211	332004	赤土土器	甕	6.9* a		(外面) ココナデ・胎付文様・ナデ・タテ方向のハク (内面) ココナデ・タテ方向のハク	黄褐色～灰褐色	少	少	下地式土器
	212	332004	赤土土器	甕	5.8* a		(外面) タテハク・ココナデ・胎付文様 (内面) ココナデ・ココナデ	黄褐色	少	多	下地式土器
	213	332004	赤土土器	甕	5.2* a		(外面) ココナデ・胎付文様・ナメ方向のハク (内面) ナデ	黄褐色	少	少	
	214	332004	赤土土器	甕	5.5* a		(外面) 胎付文様・ココナデ・胎線 (内面) ココナデ	にじい・黄褐色	少	少	下地式土器
	215	332004	赤土土器	甕	7.9* a		(外面) ココナデ・タテハク・ココナデ・胎付文様 (内面) ココナデ・タテハク・ユビオオス	にじい・褐色	少	少	
	216	332004	赤土土器	高杯	4.5* a		(外面) 不明 (割破) (内面) 不明 (割破)	黄褐色	多	少	
	217	332004	赤土土器	高杯	12.7.8 6.5* a		(外面) ココナデ・ナデ (内面) ココナデ・ナデ	黄褐色～灰褐色	多	多	
	218	332004	赤土土器	高杯	3.6* a		(外面) ココナデ・タテハク・タテハク・タテハク (内面) ナデ・胎付文様	黄褐色	少	少	内面：胎線あり 胎付胎線付 (1.4.6)
	219	332004	赤土土器	高杯	3.8* a		(外面) ココナデ・ココナデ (内面) ナデ	灰黄褐色	少	少	
72	220	332004	赤土土器	高杯	13.1 6.0* a		(外面) 不明・ココナデ (内面) ココナデ	黄褐色	少	少	内面：胎線あり
	221	332004	赤土土器	高杯	13.4 6.5* a		(外面) ココナデ・タテハク・タテハク・タテハク (内面) ココナデ・タテハク・ナデ	にじい・黄褐色～黄褐色	多	少	

第16表 遺物観察表6 (土器・陶磁器)

調査番号	遺物番号	品名	器種	法 量 (cm)			文様・調整	色 調	胎 土			備 考		
				口 径	器 高	底径			角 閃 石	長 石	石 質			
72	222	532004	赤土土器	鉢	(19.2)	12.2+ α	(外面) タテハタ横ミギキ・ヨコナデ (内面) ナデ横ヘタミギキ	暗褐色	多	多		外面：黒焼あり		
	223	532004	赤土土器	壺		10.1+ α	(外面) ヘラタズミ・ナデ・2条の三角窓 (内面) 上長ナデ横ナデ	明黄褐色	多	多				
	224	532004	赤土土器	壺		5.1+ α	(外面) ヨコナデ・月形窓 (内面) ナデ	赤褐色	少	少		外面：丹塗あり		
	225	532004	赤土土器	底皿		3.3+ α	6.9	(外面) タテ方向のハタ・ナデ (内面) ナデ	にじみ褐色	多	少			
	226	532004	赤土土器	底皿		4.9+ α	5.8	(外面) ハタ横ミギキ (内面) ミギキ	暗赤褐色	多	多			
	227	532004	赤土土器	底皿		5.2+ α	2.5	(外面) ナデ横ナメ方向のハタ・ナデ (内面) ヨコナデ	淡黄色	少	少			
	228	532004	赤土土器	底皿		4.2+ α	5.6	(外面) ヨコナデ・ナデ (内面) ヨコナデ	淡黄色	少	少			
	229	532004	赤土土器	底皿		5.0+ α	(外面) ハタ・ヨコナデ (内面) 上長横ナデ・ユビオサズミ	にじみ黄褐色	多	少				
	230	532004	赤土土器	底皿		6.4+ α	2.2	(外面) 縦ハタタテ・ナデ (内面) ヨビオサズミ横上長ナデ・工具痕	明褐色	多	多			
	231	532004	赤土土器	底皿		6.8+ α	6.4	(外面) タテ方向のハタ・ヨコナデ・ナデ (内面) ヨコナデ	淡黄色	多	少		内面：スス付着・底部に赤色顔料あり	
	232	532004	赤土土器	底皿		6.2+ α	(外面) ナデ・ヨコナデ (内面) ナデ	暗褐色	少	多				
	233	532004	赤土土器	底皿		7.6+ α	(外面) ハタ・ヨコナデ・ナデ (内面) ナデ	褐色	多	少	多			
	234	532004	赤土土器	底皿		9.0+ α	(外面) タテ方向のハタ・ヨコナデ・ナデ (内面) ナデ	褐色	多					
	235	532004	赤土土器	底皿		17.5+ α	5.8	(外面) ハタ・ヨコナデ・ナデ (内面) 横ミギキ	暗褐色	多	多	少		
	236	532004	赤土土器	底皿		6.05+ α	8.7	(外面) ヨコナデ・ユビオサズミ・ナデ (内面) ヨコナデ・ユビオサズミ	褐色	少	少	少	口縁左端	
	237	532004	赤土土器	底皿		5.0+ α	3.5	(外面) ナデ横ナメ方向のハタ・ナデ (内面) ナデ	灰白色・灰褐色	少	少			
	238	532004	赤土土器	底皿		8.3+ α	2.9	(外面) ヨビオサズミ・タテハタナデ (内面) ヨコナデ	暗褐色	多	多		外面：黒焼あり	
74	254	532004	煎茶器	茶碗		1.4+ α	(外面) ナデ (内面) ナデ	灰色	少	少				
	255	532004	煎茶器	茶碗	(13.5)	1.3+ α	(外面) ヨコナデ (内面) ヨコナデ	暗灰色	少					
	256	532004	煎茶器	杯		1.3+ α	(外面) ヨコナデ (内面) ヨコナデ	灰色	少					
	257	532004	煎茶器	杯		2.4+ α	(外面) 同軸ナデ・龍付合・ヘラ切り (内面) 同軸ナデ	灰色	少					
	258	532004	煎茶器	杯		1.3+ α	(外面) ヨコナデ (内面) ヨコナデ	灰色	少					
	259	532004	煎茶器	杯		1.8+ α	(外面) 同軸ナデ横ミギキ・同軸ヘラ切 (内面) 同軸ナデ横ミギキ方向のヘタミギキ	にじみ褐色・灰色	少	少				
	260	532004	煎茶器	口縁皿		2.4+ α	(外面) ヨコナデ・龍付合・ヘラ切り (内面) ヨコナデ	灰色						
	261	532004	煎茶器	高杯小		2.1+ α	(外面) ナデ (内面) ナデ	灰色	少	少				
	262	532004	煎茶器	長柄瓶		6.2	(外面) 同軸ヨコナデ・波線 (内面) 同軸ヨコナデ	暗赤褐色						
	263	532004	煎茶器	長柄瓶	(8.3)	6.4+ α	(外面) 同軸ヨコナデ・波線 (内面) 同軸ヨコナデ	赤褐色						
	264	532004	煎茶器	杯		3.1+ α	(外面) 同軸ヨコナデ・同軸ナデ (内面) 同軸ヨコナデ	灰色	少					
75	265	532004	煎茶器	壺		6.8+ α	(外面) ヨコナデ・タタキ痕 (内面) ヨコナデ・同心行文	灰色	少	多				
	266	532004	煎茶器	壺	(20.8)	7.6+ α	(外面) ヨコナデ・ナデ横ミギキ (内面) ヨコナデ・同心行文	暗灰色	少	多				
	267	532004	煎茶器	瓶		23.9+ α	(外面) タタキ痕平年目 (内面) 同心行文	灰白色	少					
	268	532004	土師器	杯		4.5	(外面) ナデ (内面) ナデ	淡黄褐色	多	少	多			
	269	532004	土師器	杯		4.3+ α	(外面) ナデ (内面) ナデ	褐色	多	多	少			
	270	532004	土師器	杯	(14.3)	4.3+ α	(外面) ヨコナデ (内面) ヨコナデ	淡明褐色	多	多				
	271	532004	土師器	杯	14.2	4.5	(外面) ヨコナデ・同軸ヘラタズミ (内面) ヨコナデ・ナデ	明褐色	多	多	多			
	272	532004	土師器	杯	(12.8)	4.4+ α	(外面) ナデ・工具ナデ (内面) ナデ	褐色	多	少	多			
76	273	532004	土師器	杯	(15.0)	4.6+ α	(外面) ヨコナデ・波線(工具ナデあり) (内面) ヨコナデ・一筋ミギキハナデ (波線)	にじみ褐色	多	多	少	口縁部：黒焼あり		
	274	532004	土師器	杯	(13.8)	3.7+ α	(外面) ヨコナデヘラ切 (内面) ナデ	褐色	少					
	275	532004	土師器	杯	(13.4)	3.3+ α	(外面) ナデ (内面) ナデ	褐色	少	少	少			
	276	532004	土師器	杯	(15.4)	4.2	(外面) 同軸ナデ・同軸ヘラ切 (内面) 同軸ナデ・ナデ	褐色・黄褐色	少	多	少			

第17表 遺物観察表7 (土器・陶磁器)

調査番号	遺物番号	品名	器種	法 量 (cm)			文様・図案	色 調	胎 土			備 考	
				口 径	底 径	高 径			角 閃 石	長 石	石 莖		
75	277	532004	土師器	片	(15.2)	3.7	9.4	(外面) 同軸ナズ・同軸ヘリ切離し (内面) 同軸ナズ・工具仕上げナズ	褐色色	少	多	少	
	278	532004	土師器	片	(16.4)	6.1+α		(外面) ナズ (内面) ナズ	褐色	多	多	少	
	279	532004	土師器	片		1.1+α	(11.3)	(外面) ロココナズ・ヘリ切 (内面) ロココナズ	褐色色	少	少		
	280	532004	土師器	皿	(16.6)	1.9+α	12.4	(外面) ナズ・同軸ホリ (内面) ロココナズ・ココナズ後ミガキ	にじみ・褐色	少	少		
	281	532004	土師器	皿	(16.4)	2.5	(11.4)	(外面) ナズ・ミガキ・同軸ヘリ切離し (内面) 同軸ナズ後ヘリミガキ	褐色褐色	少	多	少	
	282	532004	土師器	皿	(16.2)	1.6	(12.2)	(外面) ココナズ・同軸ヘリ切り離し (内面) ココナズ・ココナズ後ミガキ	褐色	少	少	少	
	283	532004	土師器	皿		0.9+α	(12.5)	(外面) ココナズ・同軸ヘリ切り離し (内面) ココナズ後ミガキ	褐色	少	少	少	
	284	532004	土師器	皿		1.2+α		(外面) 同軸ココナズ・同軸ホリ (内面) 同軸ココナズ	褐色・にじみ・褐色	少	少	少	
	285	532004	土師器	皿		1.2+α		(外面) 土器ナズ (内面) ハナ	褐色	多	少	多	
	286	532004	土師器	鉢	(25.0)	9.1	(11.9)	(外面) ココナズ・ナズ・同軸ナズ (内面) ココナズ・同軸ナズ	褐色	少	少		
76	287	532004	土師器	片		3.9+α	(11.4)	(外面) ミガキ (内面) ナズ・ミガキ	褐色	多	少	少	
	288	532004	土師器	杓	(16.1)	11.9+α		(外面) ココナズ・ミガキ (内面) ココナズ・コビヤナ	にじみ・黄褐色～明褐色	多	多	多	内面：スミ付着
	289	532004	土師器	壺	(12.2)	6.9+α		(外面) ココナズ・コビヤナ後ミガキ (内面) ココナズ・コビヤナ後ミガキ	黄褐色	多	多	多	内面：スミありスミ
	290	532004	土師器	壺	(12.4)	1.9+α		(外面) ココナズ・ココナズ・ナメハナ (内面) ココナズ	褐色	少	少		
	291	532004	土師器	杓		9.9+α		(外面) ナズ・コビヤナ (内面) 接合部・ナズ・コビヤナ	黄褐色～黄褐色	多	多		胴部最大径：(18.0)
	292	532004	土師器	壺	(12.2)	6.0+α		(外面) ココナズ・ココナズ・ココナズ (内面) ココナズ	にじみ・褐色	多	少	多	
	293	532004	土師器	土師器		11.9+α		(外面) ココナズ・ナメハナ・同軸ナズ (内面) ココナズ・ココナズ・ココナズ	灰白色	少	少		
	294	532004	土師器	壺	(22.0)	14.0+α		(外面) ココナズ・ナズ後ミガキ (内面) ココナズ・ミガキ後ナズ	黄褐色	少	少		
	295	532004	土師器	瓶口半		6.0+α		(外面) コビヤナ・ナズ (内面) コビヤナ・ナズ	黄褐色	多	多	少	
	296	532004	土師器	高片断		6.5+α		(外面) ナズ後ミガキ方面のハナ・ココナズ (内面) ナズ・ココナズ	灰白色	少	少		胴部：通しあり
77	297	532004	土師器	瓶口半		6.0+α	12.8	(外面) ココナズ・ナズ (内面) ココナズ・ナズ	褐色	多	少	少	
	298	532004	土師器	瓶口半		6.1+α		(外面) コビヤナ・コビヤナ (内面) ココナズ	にじみ・黄褐色	少	少	少	
	299	532004	土師器	瓶口半		6.4+α		(外面) ナズ・尊立 (内面) ナズ	褐色	少	多		
	302	532004	土師器	製塩土器	(11.1)	2.5+α		(外面) 製塩 (内面) 製塩	黄褐色	少	少		胴部径：(6.4)
	303	532004	土師器	製塩土器		3.7+α		(外面) コビヤナ・ナズ (内面) 製塩・製塩	灰白色	少	少		
	304	532004	土師器	製塩土器		3.5+α		(外面) ナズ (内面) 製塩	褐色	少	少		
	305	532004	土師器	製塩土器		2.5+α		(外面) ナズ (内面) 製塩	灰黄褐色	少	少		
	306	532004	土師器	製塩土器		2.8+α		(外面) コビヤナ・ナズ (内面) コビヤナ・ナズ	黄褐色	少	少		
	307	532004	土師器	製塩土器		3.2+α		(外面) コビヤナ (内面) コビヤナ	褐色	少	少	少	
	308	532004	土師器	製塩土器		6.0+α		(外面) ナズ・コビヤナ (内面) ナズ	黄褐色	少	少		
78	309	532004	土師器	製塩土器		3.1+α		(外面) コビヤナ (内面) コビヤナ	褐色	少	少	少	
	310	532004	土師器	瓶口半	(12.4)	3.5+α		(外面) ミガキ (内面) ミガキ・ココナズ	黄褐色	少	少	少	
	311	532004	土師器	瓶口半		1.1+α		(外面) ココナズ・同軸ナズ・ヘリ切 (内面) ココナズ・工具ナズ	にじみ・褐色	少	少	少	
	312	532004	土師器	瓶口半		3.2+α		(外面) 同軸ナズ・同軸ナズ・文様 (内面) 同軸ナズ	褐色色	少	多		内面：自然剥離
	313	532004	土師器	片	(14.4)	3.6	3.8	(外面) 同軸ナズ・ヘリ切離し (内面) 同軸ナズ	黄褐色	少	多		
	314	532004	土師器	片		2.5+α		(外面) 同軸ココナズ・同軸ヘリ切 (内面) 同軸ココナズ	褐色色	多	多	多	内面：スミ付着 最大胴径：(6.4)
	315	532004	土師器	片		2.5+α	(6.2)	(外面) 同軸ナズ・ヘリミガキ (内面) 同軸ナズ・ヘリミガキ	黄褐色	少	多	多	
	316	532004	土師器	片		3.8+α		(外面) 同軸ココナズ (内面) 同軸ココナズ	にじみ・褐色	少	少	少	
	317	532004	土師器	片		6.0+α		(外面) ココナズ (内面) ココナズ	にじみ・褐色	少	少	少	
	318	532004	土師器	片		3.2+α		(外面) 同軸ココナズ (内面) 同軸ココナズ	にじみ・褐色	少	少	少	

第18表 遺物観察表8 (土器・陶磁器)

調査番号	遺物番号	器種	法 量 (cm)			文様・調整	色 調	胎 土		備 考				
			口 径	底 径	高 径			角 閃 石	石 質					
80	319	S3209	土師器	皿	1.8*	α	(外面) ナブ・ケズミ (内面) ナブ	にじい・褐色～黄褐色	少	少				
	320	S3209	土師器	高脚杯	7.2*	α	(外面) 回転ナブ・ナブ (内面) 回転ナブ・ナブ	褐色色	少	多	頸上加注: 4.8			
	321	S3209	土師器	甕	3.6*	α	(外面) ココナブ・ハタ (内面) ココナブ・ナブ	にじい・褐色	少	少				
	322	S3209	土師器	甕	3.8*	α	(外面) ハタ・ココナブ (内面) ココナブ	灰褐色	少	少				
	323	S3209	土師器	甕	(13.8)	7.0*	α	(外面) ココナブ・タタキ・ミナナブ (内面) ココナブ・ナブ	褐色色	少	少			
	324	S3209	土師器	甕	(23.7)	1.5*	α	(外面) ココナブ・ハタ (内面) ココナブ	にじい・褐色	多	多			
	325	S3209	土師器	甕	(15.6)	19.6	(13.9)	(外面) ナブ・ミナナブ・ヘラケズミ・ミナナブ (内面) ナブ・ミナナブ・ココナブ	明黄褐色	少	少	内面: 当具柄 (東海型)		
	326	S3209	土師器	甕肥子	5.7*	α	(外面) ナブ・ミナナブ (内面) ナブ	灰褐色	多	多				
	327	S3209	土師器	肥子	3.2*	α	(外面) 当具・ミナナブ (内面) ナブ・ミナナブ	灰褐色	少	少				
	81	328	S3209	土師器	坪	13.4	3.7	10.9	(外面) 回転ナブ・回転ヘリ切縁 (内面) 回転ナブ	灰褐色	少	少		
		329	S3209	土師器	鉢	9.2*	α	(外面) 回転ナブ・タタキ・ミナナブ (内面) 回転ナブ	灰褐色	少	少			
330		S3209	土師器	高脚杯	16.1*	α	(13.8)	(外面) 丁摩ナブ・ココナブ (内面) ココナブ・ミナナブ・ミナナブ・ミナナブ	灰色			頸部最大径: (26.2) 底×底面径: (9.4)		
331		S3209	土師器	甕	(20.2)	1.3*	α	(外面) ココナブ・タタキ (内面) ココナブ・同心行文	灰褐色	少	少			
332		S3209	土師器	甕	(23.9)	9.5*	α	(外面) ココナブ・ココナブ・ミナナブ・タタキ (内面) ココナブ・ココナブ・ミナナブ・同心行文	灰褐色	少	少			
333		S3209	土師器	甕	8.5*	α	(外面) 工具ナブ・ミナナブ (内面) 工具ナブ・ナブ	灰白色	少	少				
82		334	S3209	土師器	甕	(15.4)	15.2*	α	(外面) 当具・回転ナブ・高脚杯文 (内面) 当具・回転ナブ	青灰色	多	多	3本の螺旋状文	
		335	S3209	土師器	甕	(23.0)	18.2*	α	(外面) 当具 (内面) 当具	灰褐色	少	多		
		336	S3209	土師器	甕	5.3*	α	(外面) 高脚杯文・流線 (内面) ココナブ	オリーブ色				外面: 流線	
		337	S3209	土師器	甕	5.4*	α	(外面) ココナブ・タタキ (内面) ココナブ・同心行文	褐色・黄褐色					
		338	S3209	土師器	甕	(27.5)	17.5*	α	(外面) 平行タタキ・ナブ (内面) 同心行文	灰褐色				
	339	甕上	赤土土器	甕	(27.1)	1.4*	α	(外面) 高脚杯文・ナブ (内面) ナブ・流線	褐色	多	多			
	340	甕上	赤土土器	甕	5.1*	α	(外面) ココナブ・ハタ (内面) ココナブ・ナブ	にじい・黄褐色	多	多	少			
	341	甕上	赤土土器	甕	4.7*	α	(外面) 高脚杯文・ミナナブ・丁摩ナブ (内面) 丁摩ナブ	にじい・褐色	多	多	多	丁摩式土器		
	342	甕上	赤土土器	甕	3.1*	α	(外面) ハタ・高脚杯文・ナブ (内面) ミナナブ	にじい・褐色	多	多	少	丁摩式土器		
	343	甕上	赤土土器	甕	6.5*	α	(外面) ココナブ・高脚杯文・ハタ (内面) 工具ナブ	褐色～黄褐色	多	多	多	丁摩式土器		
	344	甕上	赤土土器	甕	5.3*	α	4.2	(外面) ココナブ・ハタ・ナブ (内面) ナブ・ミナナブ・ミナナブ・ミナナブ	にじい・褐色	多	多			
83	345	甕上	土師器	坪蓋	1.4*	α	(外面) 回転ナブ (内面) 回転ナブ・仕上げナブ	灰褐色						
	346	甕上	土師器	坪蓋	1.4*	α	(外面) 回転ナブ (内面) 回転ナブ	褐色色			少			
	347	甕上	土師器	行蓋	1.5*	α	(外面) ハラケズミ・高脚杯ナブ (内面) 回転ナブ	灰褐色			少	坪の両利用		
	348	甕上	土師器	坪	2.9*	α	9.6	(外面) 回転ナブ (内面) 回転ナブ・不定方向のナブ	青灰色			少		
	349	甕上	土師器	坪	(15.4)	5.9	(16.9)	(外面) 回転ナブ (内面) 回転ナブ・仕上げナブ	青灰色			少		
	350	甕上	土師器	坪蓋	1.4*	α	(外面) 回転ナブ (内面) ナブ	褐色色			多	つまみ径: 1.4		
	351	甕上	土師器	坪蓋	(13.2)	4.3	(16.4)	(外面) 回転ナブ・ハタ・回転ナブ (内面) 回転ナブ・高脚杯・ミナナブ	褐色・黄褐色			少	多	
	352	甕上	土師器	坪蓋	(16.9)	1.8*	α	(外面) ココナブ (内面) ココナブ	明褐色			少	少	
	353	甕上	土師器	坪蓋	(17.6)	1.7	(14.4)	(外面) ナブ・回転ナブ (内面) 回転ナブ・高脚杯・ミナナブ	褐色色			多	多	
	354	甕上	土師器	坪	3.8*	α	(外面) 回転ナブ・高脚杯・ミナナブ (内面) 回転ナブ・高脚杯・ミナナブ	褐色色			多	多		
	355	甕上	土師器	坪	(11.9)	3.5*	α	(外面) ココナブ・高脚杯・ミナナブ (内面) ココナブ・高脚杯・ミナナブ	褐色色			少	少	
356	甕上	土師器	坪	(16.4)	2.1	(12.4)	(外面) 回転ナブ・回転ヘリ切縁 (内面) 回転ナブ・高脚杯・ミナナブ	褐色			少	多	多	
357	甕上	土師器	坪	12.0*	α	(外面) ココナブ・コソ方向のタタキ (内面) ココナブ・工具ナブ	明黄褐色			多	多	割取: 肥子		
360	甕上	土師器	甕	2.5*	α	3.4	(外面) 高脚杯・高脚杯 (内面) 高脚杯・高脚杯	灰褐色						内面: 足込内に粘土粒 外面: 高脚杯内に粘土粒

第19表 遺物観察表9 (土器・陶磁器)

調査 番号	遺物 番号	器 種	形 式	法 量 (cm)			文様・調整	色 調	胎 土		備 考	
				口 径	器 高	底 径			角 質 石 質			
82	361	甕土	土師器	円	(17.4)	4.2	(底.3)	(外面) 赤褐色・黒褐色・ヨコナデ (内面) ナデ・ヨコナデ	褐色	多	少	
	362	甕土	赤土器	壺	(24.6)	9.3	a	(外面) タタハキ・ヨコナデ (内面) ナデ・ヨコナデ	淡褐色		多	
	363	甕土	赤土器	壺	(26.4)	6.9	a	(外面) ヨコナデ・タタハキ裏ヨコナデ (内面) ヨコナデ・ナデ	淡褐色～褐色間色	多	多	
	364	甕土	赤土器	高杯	(25.0)	4.2	a	(外面) タタハキ・ヨコナデ (内面) ナデ・ヨコナデ	褐色	多	多	
	365	甕土	赤土器	壺		1.9	a	(外面) ナデ・文様 (内面) ナデ	にぶい褐色	少	少	
	366	甕土	赤土器	壺		4.6	a	(外面) ナデ・高文 (内面) ナデ	にぶい褐色	少	少	
	367	甕土	赤土器	壺	(17.0)	8.9	a	(外面) ヨコナデ・斜目文・ハナ (内面) ヨコナデ・ナデ・ムシゴキ	灰褐色	少	少	
	368	甕土	赤土器	壺	(28.8)	11.2	a	(外面) ヨコナデ・斜目文・ハナ (内面) ヨコナデ・ナデ	褐色	少	多	
	369	甕土	赤土器	年	(8.2)	2.0	5.8	(外面) 同様にヨコナデ (内面) 同様にヨコナデ	灰色		少	
	370	甕土	赤土器	瓶		2.8	a	(外面) 同様にハナズリ・同様にナデ (内面) 同様にナデ	灰褐色		少	内外面：自然剥片付 割断面大径 (18.4)
	371	甕土	土師器	円蓋		1.7	a	(外面) 同様にハナズリ・同様にナデ (内面) 同様にナデ・仕上げナデ	褐色		少	
	372	甕土	土師器	円蓋		1.6	a	(外面) 同様にナデ・ハナズリ (内面) 同様にナデ・ハナズリ	黄褐色	少	多	
	373	甕土	土師器	円	13.6	3.0	8.0	(外面) 同様にヨコナデ (内面) 同様にヨコナデ	にぶい褐色	少	少	
	374	甕土	土師器	円	(12.1)	2.0	(底.0)	(外面) 同様にヨコナデ (内面) 同様にヨコナデ	褐色	少	少	
	375	甕土	土師器	円		2.3	a	(外面) ミゴキ・同様にヨコナデ (内面) ミゴキ	褐色		少	
83	376	焼土	赤土器	壺		2.9	a	(外面) ハナズリ・ナデ・ヨコナデ・高文 (内面) ヨコナデ	褐色	多	多	
	377	焼土	赤土器	壺	(25.2)	4.7	a	(外面) ハナズリ・高文・ミゴキ・ナデ (内面) ナデ・高文・ミゴキ	にぶい褐色	多	多	
	378	焼土	赤土器	壺	(20.0)	6.8	a	(外面) ナデ・高文・ミゴキ・高文 (内面) ナデ・高文・ミゴキ	黄褐色	少	少	
	379	焼土	赤土器	壺	(12.0)	4.8	a	(外面) ヨコナデ・ナデ・斜目文・洋文 (内面) ヨコナデ・ナデ	黒灰色～灰白色	多	少	
	380	焼土	赤土器	壺	(27.6)	6.0	a	(外面) ヨコナデ・ハナズリ (内面) ヨコナデ・ナデ	褐色	多	多	
	381	焼土	赤土器	壺	(24.0)	9.0	a	(外面) ヨコナデ・ナデ・高文・ハナ (内面) ヨコナデ・ナデ	黄褐色	多	少	
	382	焼土	赤土器	壺		3.6	a	(外面) ヨコナデ・タタハキ裏ヨコナデ (内面) ヨコナデ・ナデ	明褐色	多	多	外面：赤色剥片付
	383	焼土	赤土器	壺		4.7	a	(外面) ヨコナデ・ハナ (内面) ヨコナデ・ナデ	黄褐色～灰白色	少	多	
	384	焼土	赤土器	壺口縁		3.1	a	(外面) ヨコナデ・ハナ (内面) ナデ	にぶい褐色～にぶい褐色	多	少	
	385	焼土	赤土器	赤土器		4.6	a	(外面) 高文 (内面) ナデ	褐色	少	少	下城式土器
84	386	焼土	赤土器	赤土器		3.9	a	(外面) 文様 (内面) ナデ	灰褐色	少	少	下城式土器
	387	焼土	赤土器	赤土器		4.1	a	(外面) 高文・文様 (内面) ナデ	褐色	少	少	下城式土器
	388	焼土	赤土器	赤土器		7.1	a	(外面) 文様・ナデ (内面) ナデ	褐色	少	少	下城式土器
	389	焼土	赤土器	壺	(29.2)	9.3	a	(外面) ヨコナデ・斜目文・ハナ (内面) ヨコナデ・ミゴキ	にぶい褐色～にぶい褐色	多	少	下城式土器
	390	焼土	赤土器	壺		6.9	a	(外面) 斜目文・ナデ・ヨコナデ (内面) ヨコナデ・ナデ	褐色	多	多	下城式土器
	391	焼土	赤土器	壺	(22.2)		a	(外面) ヨコナデ・斜目文・ナデ・ハナ (内面) ナデ・高文・ミゴキ	褐色	少	少	下城式土器
	392	焼土	赤土器	壺		8.0	a	(外面) ヨコナデ・ナデ・斜目文・ハナ (内面) ヨコナデ・ミゴキ	にぶい褐色	多	少	下城式土器
	393	焼土	赤土器	壺		7.0	a	(外面) ヨコナデ・ナデ・ハナ (内面) ナデ・高文・ミゴキ	黄褐色	少	少	下城式土器
	394	焼土	土師器	円蓋	(13.1)	3.0		(外面) ナデ・同様にハナズリ・ヨコナデ (内面) ヨコナデ	淡明褐色	少	少	
	395	焼土	土師器	円	(11.2)	3.2	(底.0)	(外面) ヨコナデ・高文 (内面) ヨコナデ・高文	褐色	少	少	
85	396	焼土	土師器	円	(13.0)	4.4		(外面) 同様にナデ・同様にハナズリ (内面) 同様にナデ	淡黄褐色	少	多	
	397	焼土	土師器	円	(15.4)	3.6	(底.0)	(外面) 同様にナデ・同様にハナズリ (内面) 同様にナデ	褐色	少	少	
	398	焼土	土師器	円	(12.8)	3.5	(底.0)	(外面) ヨコナデ・ハナズリ・高文 (内面) ヨコナデ	淡明褐色～淡黄褐色	多	多	
	399	焼土	土師器	円	(16.0)	4.0	a	(外面) タタハキ・ヨコナデ (内面) ナデ・ヨコナデ	褐色	少	多	
	400	焼土	土師器	円	(14.6)	3.3	a	(外面) 同様にハナズリ・同様にナデ (内面) 同様にナデ	黄褐色	多	少	

第 20 表 遺物観察表 10 (土器・陶磁器)

調査番号	遺物番号	品名	器種	法 量 (cm)			文様・調整	色 調	胎 土			備 考
				口 径	底 径	高 径			角 質	石 質	石 質	
87	401	焼出	土師器	円	(14.2)	1.9+α	(外底) コクハナデ・ナデ (内底) コクハナデ	淡明褐色	少	少		
	402	焼出	土師器	円	(14.3)	3.8	8.2 (外底) ナデ (内底) ナデ	褐色	多	多	多	
	403	焼出	土師器	円		1.2+α	(外底) 同底ナデ底ヘラミダリ (内底) 同底ナデ底ヘラミダリ	褐色	少	多		
	404	焼出	土師器	圓	(16.6)	1.7+α	(外底) ミダリ・同底ヘラミダリ (内底) 同底ナデ底ミダリ	褐色				
	405	焼出	土師器	圓	(16.6)	4.6	(13.6) (外底) ミダリ・ナデ (内底) ミダリ	淡褐色	多	少	少	
	406	焼出	須恵器	壺	(13.4)	3.5	(外底) 同底ナデ・同底ヘラミダリ (内底) 同底ナデ	黒灰色・黄灰色	多	少		
	407	焼出	須恵器	円		1.5+α	(外底) 同底ナデ・同底ヘラミダリ (内底) 同底ナデ	青灰色	少	多	少	
	408	焼出	須恵器	高杯		9.7+α	(外底) ミダリナデ・コクハナデ・コクハナデ (内底) ミダリコクハナデ	黒灰色				器底端十粒：3.3
	409	焼出	須恵器	高杯小	(17.5)	2.7+α	(外底) コクハナデ (内底) コクハナデ	黒色				内底：自然剥け着
	410	焼出	須恵器	高杯小	(18.8)	2.5+α	(外底) 同底ナデ (内底) 同底ナデ	黒褐色				内底：自然剥け着
	411	焼出	土師器	製塩土器		3.3+α	(外底) ナデ (内底) 布目版	暗茶褐色	少	多	少	
	412	焼出	土師器	製塩土器		2.2+α	(外底) ナデ (内底) 布目版	黄褐色	少	少		
88	417	焼出	養生土器	甕		4.8+α	(外底) コクハナデ・ナデ・ユビオサニ・文様 (内底) コクハナデ	にじみ黄褐色	少	少		
	418	焼出	養生土器	甕	(14.6)	4.1+α	(外底) コクハナデ・ミダリ・管孔 (内底) コクハナデ・ナデ・ユビオサニ	淡黄褐色	少	少		
	419	焼出	養生土器	甕	(23.6)	12.7+α	(外底) ミダリ・コクハナデ (内底) コクハナデ・ナデ・ユビオサニ	にじみ褐色	少	少	少	
	420	焼出	養生土器	甕		3.1+α	(外底) コクハナデ・文様 (内底) ナデ・ユビオサニ	にじみ褐色	少	少		
	421	焼出	養生土器	甕		6.1+α	(外底) コクハナデ・ミダリ・管孔 (内底) ミダリ	黄褐色	少	少		
	422	焼出	養生土器	高杯		7.0+α	11.2 (外底) ミダリ・コクハナデ・ナデ (内底) ナデ	にじみ黄褐色	少	少		
	423	焼出	養生土器	高杯		4.5+α	(外底) ナデ (内底) ミダリナデ	にじみ褐色	少	少		
	424	焼出	土師器	円	(16.6)	3.95	8.9 (外底) コクハナデ・ヘラミダリ (内底) コクハナデ・ナデ	黄褐色～褐色	少	少	少	内底：ヘラミダリ等あり
	425	焼出	土師器	円	(15.6)	4.1	18.5 (外底) コクハナデ・ミダリ (内底) コクハナデ・ミダリ	褐色	少	少		
	426	焼出	土師器	円	(15.4)	4.3+α	(外底) コクハナデ・ナデ (内底) コクハナデ・ナデ	黄褐色	少	少	少	
	427	焼出	須恵器	円	(16.6)	3.1+α	(外底) 同底ナデ (内底) 同底ナデ	灰色				
	428	焼出	須恵器	円		2.9+α	(外底) 同底ナデ (内底) 同底ナデ	暗灰色				
	429	焼出	須恵器	円		2.2+α	(外底) 同底ナデ (内底) 同底ナデ	灰色				

第 21 表 遺物観察表 11 (土器・陶磁器)

調査 番号	遺物 番号	品名	器 種	法 量 (cm)			文様・図案	色 調	土 質			備 考
				口 径	底 径	高 径			角 石	長 石	石 質	
93	434	SR0001	煮火土器	甕		3.2* a	(外面) ココナデ・ナデ・周縁文様 (内面) ココナデ・ナデ・ユビオサス	にじい・黄褐色	少	少		
	435	SR0004	煮火土器	高杯		4.7* a	(外面) 土器ナデ・ココナデ (内面) ナデ	にじい・黄褐色	少	少		口縁部破片
	436	SR0001	煮火土器	甕		6.2* a	(外面) タテハタ目・ナデ・ココナデ (内面) ナデ・ユビオサス	にじい・褐色	少	少		
96	432	SR0103	煮火土器	甕	(20.0)	1.3* a	(外面) ナデ・ココナデ (内面) ナデ	淡褐色	少	少		
	433	SR0103	煮火土器	甕		7.3* a	(外面) ナデ・周縁文様 (内面) ナデ	灰褐色	多	少		
	434	SR0103	煮火土器	高杯	(8.0)	6.5* a	(外面) ココナデ・ナデ (内面) ココナデ・ナデ	赤褐色	多	少		
98	437	SR0070	煮煮器	片蓋		3.4* a	(外面) 周縁ナデ・周縁ナデ (内面) ナデ・周縁ナデ	褐色				SR0015 出土
	438	SR0075	煮煮器	片		1.4* a	(外面) 周縁ナデ・周縁ナデ (内面) 周縁ナデ	灰褐色				SR0015 出土
	439	SR0075	土師器	蓋		1.4* a	(外面) ココナデ・ナデ (内面) ココナデ・ココナデ	明褐色	少	少		SR0015 出土
	440	SR0075	土師器	片		2.0* a	(外面) ココナデ・ナデ (内面) ココナデ・ナデ	灰褐色	多	多		SR0015 出土
	441	SR0075	土師器	片蓋		1.0* a	(外面) 周縁ナデ (内面) 周縁ナデ	黄褐色	少	少		SR0015 出土
	442	SR0075	土師器	片		3.5* a	(外面) ナデ (内面) ナデ	黄褐色	少	少		SR0015 出土
	443	SR0075	土師器	片		3.0* a	(外面) 周縁ナデ (内面) 周縁ナデ・周縁ナデ	黄褐色	少	少		SR0015 出土
	444	SR0075	土師器	片		1.6* a	(外面) ナデ (内面) ナデ・周縁ナデ	褐色	少	少		SR0015 出土
	445	SR0075	土師器	口縁片		3.8* a	(外面) ココナデ (内面) ココナデ	黄褐色	少	多		SR0015 出土
	446	SR0075	土師器	蓋		1.50* a	(外面) ナデ (内面) ナデ	黄褐色	少	多		SR0015 出土
	447	SR0075	土師器	割板土器		3.0* a	(外面) ナデ・ユビオサス (内面) 周縁ナデ	にじい・褐色	多	多		SR0015 出土
	449	SR0075	煮火土器	甕		5.0* a	(外面) 周縁ナデ・周縁ナデ (内面) ユビオサス・ナデ・周縁ナデ	明褐色	多	多		SR0015 出土
100	450	SR0075	煮火土器	高杯		6.2* a	(外面) 土器ナデ (内面) ココナデ・ナデ	淡黄色	多	多		SR0015 出土
	453	SR0003	煮火土器	甕		2.0* a	(外面) ココナデ・タテハタ目 (内面) ココナデ	にじい・黄褐色	少	少		
	456	SR0003	煮火土器	甕		1.6* a	(外面) ココナデ (内面) ココナデ	淡黄褐色	少	少		
	457	SR0003	煮火土器	甕		2.0* a	(外面) ココナデ (内面) ココナデ	褐色	少	少		
	458	SR0003	煮火土器	甕		5.0* a	(外面) ココナデ・ナデ・周縁ナデ (内面) ココナデ・ナデ	にじい・褐色	少	少		
	459	SR0003	煮火土器	甕	(9.2)	8.7 (7.4)	(外面) 土器ナデ・タテハタ目・ココナデ (内面) ココナデ・ナデ・ユビオサス	にじい・黄褐色	少	少		
	460	SR0003	煮火土器	甕	(9.2)	8.7 (7.4)	(外面) 土器ナデ・タテハタ目・ココナデ (内面) ココナデ・ナデ・ユビオサス	にじい・黄褐色	少	少		最大口径 18.7
	461	SR0007	煮火土器	甕		3.9* a	(外面) ココナデ・ユビオサス (内面) ココナデ・ユビオサス	淡明褐色	多	多		タテハタ目 7cm
	462	SR0007	煮火土器	甕		1.5* a	(外面) ココナデ (内面) ココナデ・ココナデ	淡灰褐色	多	多		
	463	SR0007	煮火土器	甕		4.5* a	(外面) ココナデ・周縁ナデ (内面) ココナデ・ナデ	淡褐色	多	多		
	464	SR0007	煮火土器	甕		3.3* a	(外面) ココナデ・周縁ナデ (内面) ココナデ・ユビオサス・ナデ	黄褐色	多	多		下縁式土器 タテハタ目 7cm
	465	SR0007	煮火土器	高杯		4.3* a	(外面) タテハタ目・ナデ・ココナデ (内面) ココナデ・ナデ・ココナデ	淡明褐色	多	多		タテハタ目 7cm
102	466	SR0007	煮火土器	高杯		3.4* a	(外面) タテハタ目・ナデ・ココナデ (内面) ココナデ・ナデ・ココナデ	灰褐色	少	少		タテハタ目 7cm
	467	SR0007	煮火土器	高杯		4.3* a	(外面) タテハタ目・ナデ・ココナデ・ナデ (内面) ナデ	灰褐色	多	多		タテハタ目 7cm
	468	SR0010	煮火土器	甕		16.4* a	(外面) 淡褐色・ハタ目 (内面) 土器ナデ	黄褐色・黄褐色	少	少		内面黒色あり
	469	SR0010	煮火土器	高杯		12.2* a	(外面) タテハタ目・ハタ目・ナデ (内面) ナデ	灰褐色	少			
	470	SR0033	煮火土器	甕	(25.0)	6.2* a	(外面) ナデ・ハタ目・ナデ (内面) ナデ・ナデ	灰黄褐色	多	多		浮文あり
	471	SR0033	煮火土器	高杯		4.5* a	(外面) ハタ目・ナデ (内面) ナデ	褐色	多	多		
	472	SR0080	煮火土器	甕		4.3* a	(外面) ナデ (内面) ナデ	黄褐色	多	多		
	473	SR0080	煮火土器	甕		5.2* a	(外面) ココナデ・ナデ・周縁ナデ (内面) ナデ・ユビオサス	黄褐色	多	多		
	474	SR0080	煮火土器	高杯		5.6* a	(外面) 多方向のハタ目・ナデ (内面) 土器ナデ	黄褐色	少	多		
	475	SR0081	煮火土器	高杯		4.2* a	(外面) タテハタ目・ハタ目・ナデ (内面) ナデ	にじい・褐色・黄褐色	少	少		
	476	SR0081	煮火土器	高杯		4.2* a	(外面) タテハタ目・ハタ目・ナデ (内面) ナデ	にじい・褐色・黄褐色	少	少		

第 22 表 遺物観察表 12 (土器・陶磁器)

調査番号	遺物番号	品名	器種	法 量 (cm)			文様・調色	色 調	土 質		備 考
				口 径	底 径	高 径			角 石	石 質	
308	477	甕土	甕生土器	甕		11.9 ^a	(外面) 一室丹塗り (内面) ナズ・一室丹塗り	灰白色	多	少	
	478	甕土	甕生土器	甕	(12.0)	3.4 ^a	(外面) ココナヅ・ユビオサス後ナズ (内面) ユビオサス後ココナヅ・ナズ	明褐色	多	多	
	479	甕土	甕生土器	甕	(13.2)	7.5 ^a	(外面) ユビオサス後ココナヅ・ナズ方面のナズ (内面) ココナヅ・ユビオサス・ユコハク後ナズ	淡明褐色	多	多	
	480	甕土	甕生土器	甕	(16.2)	3.2 ^a	(外面) ココナヅ・ナズ (内面) ココナヅ	灰褐色	少	少	
	481	甕土	甕生土器	甕	(30.0)	11.7 ^a	(外面) ココナヅ・ハナ一室丹 (内面) ココナヅ・甕	淡褐色	少	少	
	482	甕土	甕生土器	甕		3.4 ^a	(外面) ココナヅ・タテハク後ココナヅ (内面) ココナヅ・ナズ	暗茶褐色	多	多	タテハク 5 本 / 1 cm
	483	甕土	甕生土器	甕		3.0 ^a	(外面) ココナヅ・ハナ後ココナヅ・上見取丹 (内面) ココナヅ・ナズ	淡灰褐色	多	多	
	484	甕土	甕生土器	甕		3.4 ^a	(外面) ココナヅ・タテハク後ココナヅ (内面) ココナヅ・ナズ	淡黄褐色	多	多	
	485	甕土	甕生土器	甕	(25.2)	6.7 ^a	(外面) ココナヅ・黒付安曇・ナズ (内面) ココナヅ・ナズ	黒灰色	多	多	
	486	甕土	甕生土器	甕		3.4 ^a	(外面) ナズ黒紫斑文・黒付安曇 (内面)	赤灰色	多	多	
	487	甕土	甕生土器	甕		3.8 ^a	(外面) ココナヅ・黒目安曇・タテハク (内面) ココナヅ・ユビオサス後ナズ	暗茶褐色	多	多	タテハク 5 本 / 1 cm
	488	甕土	甕生土器	甕	6.0	6.3 ^a	(外面) ナズ・タテハク後ココナヅ (内面) ユビオサス・ナズ	明褐色	多	多	
	489	甕土	甕生土器	器台	10.7 ^a	(1.8)	(外面) 調整器 (内面) ナズ・上見ナズ	灰白色	多	少	
	490	甕土	甕生土器	底皿		3.7 ^a	(外面) ココナヅ・ナズ (内面) ナズ	灰褐色	多	多	
	491	甕土	甕生土器	底皿		3.0 ^a	(外面) タテハク・ココナヅ・ナズ (内面) ナズ	明褐色	多	多	タテハク 5 本 / 1 cm
	492	甕土	甕生土器	底皿		4.0 ^a	(外面) タテハク後ナズ・ユビオサス・ナズ (内面) ユビオサス・ナズ	淡明褐色	多	多	
	493	甕土	甕生土器	底皿		2.0 ^a	(外面) ココナヅ・ナズ (内面) 細点文	茶褐色	多	多	
138	494	焼出	甕生土器	甕		3.4 ^a	(外面) 甕 (内面) 甕	淡黄色	多	少	
	495	焼出	甕生土器	甕	11.8	4.1 ^a	(外面) ココナヅ (内面) ココナヅ	にじい褐色	多	少	
	496	焼出	甕生土器	甕		3.0 ^a	(外面) ココナヅ・二条の黒目安曇 (内面) ココナヅ	にじい褐色	多	少	下城式土器 内外面ニス付者
	497	焼出	甕生土器	甕		3.0 ^a	(外面) ココナヅ・黒目安曇 (内面) ココナヅ	灰黄褐色～灰白色	多	多	下城式土器
	498	焼出	甕生土器	甕		9.3 ^a	(外面) ココナヅ・黒目安曇・タテハク (内面) ココナヅ	にじい褐色	多	多	下城式土器
	499	焼出	甕生土器	甕小	11.8	4.1 ^a	(外面) ココナヅ・タテハク後ハナ (内面) ココナヅ・上見ココナヅ	にじい褐色	多	多	
	500	焼出	甕生土器	甕小		3.7 ^a	(外面) ココナヅ・黒目安曇 (内面) ココナヅ	淡黄褐色	多	少	
	501	焼出	甕生土器	底皿		4.9 ^a	(外面) タテハク後ハナ・ココナヅ・ナズ (内面) ナズ	褐色	多	多	
	502	焼出	甕生土器	底皿		6.3 ^a	(外面) ナズ (内面) ナズ	にじい黄褐色	多	少	
	503	焼出	甕生土器	甕小		7.9 ^a	(外面) ココナヅ・二条の黒目安曇 (内面) ナズ・ユビオサス	灰黄褐色	多	少	

第 23 表 遺物観察表 13 (土製品・鉄製品)

種別 番号	遺物 番号	遺物名	種類	法 量				備 考
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	
21	11	SR0003	土埴	5.7	1.6	1.3 ~ 1.6	10.9	孔径 : 5mm
	26	SR0022	平瓦	6.4 $\pm$ a	5.2 $\pm$ a	1.9	77.8	網目痕、布目痕あり
32	30	SR2022	土埴	4.4 $\pm$ a	2.6	2.3	24.5	孔径 : 7mm
	300	SR2004	穿孔土製品	2.9 $\pm$ a	1.5	1.5	6.3	孔径 : 4mm
76	301	SR2004	土埴	5.3	1.9	1.8	16.8	孔径 : 7mm
	358	表土	土埴	3.9 $\pm$ a	1.5	1.5	7.5	孔径 : 3mm
83	359	表土	土埴	4.1	1.3	1.0 ~ 1.3	5.2	孔径 : 13mm
	413	検出	土埴	6.2	1.2	1.2	8.8	孔径 : 5mm
87	414	検出	土埴	4.1	1.4	1.35	9.3	孔径 : 5mm
	415	検出	土埴	3.8	1.5	1.2	6.3	孔径 : 5mm
	416	検出	平瓦	7.5 $\pm$ a	9.6 $\pm$ a	1.5	88.4	釘穴あり

種別 番号	遺物 番号	遺物名	種類	法 量				備 考
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	
66	136	SR2261	釘	4.1	0.5 ~ 0.7	0.3 ~ 0.6	1.5	SP2243 出土
	137	SR2261	釘	4.3	0.5	0.2 ~ 0.5	1.6	SP2243 出土
	138	SR2261	釘	4.3	0.4 ~ 0.5	0.2 ~ 0.5	1.5	SP2243 出土
	139	SR2261	釘	3.0 $\pm$ a	0.6	0.3 ~ 0.6	1.4	SP2243 出土

第 24 表 遺物観察表 14 (石器)

種別 番号	遺物 番号	遺物名	種 類	材 質	寸 法				備 考
					長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	
29	50	SK2013	不明	凝灰岩	37.8+ α	18.2	15.3	7790.0	
	51	SK2013	不明	結晶片岩	38.8	19.6	3.1	3000.0	
	79	SK2021	穿孔石製品	遷石	2.05	1.8	1.2	5.1	
	80	SK2021	砥石	緑板岩	4.9	5.7	1.6	54.7	
33	81	SK2021	砥石	安山岩	6.1	10.9	6.6	600.0	
	82	SK2021	石重	安山岩	12.9+ α	20.7	10.6	3560.0	
37	127	SK2172	砥石	砂岩	9.5+ α	7.6	1.5	177.9	
43	147	SK2256	台石	凝灰岩	31.7	20.9	12.5	9000.0	
73	239	SK2004	打製石鏃	肥島産黒曜石	2.9	1.8	0.5	2.1	
	240	SK2004	打製石鏃	チークト	4.0	2.1	0.5	3.2	
	241	SK2004	磨製石鏃	結晶片岩	2.8+ α	1.3	0.15	1.0	
	242	SK2004	磨製石鏃	結晶片岩	2.2+ α	1.2	0.15	1.0	
	243	SK2004	磨製石鏃	結晶片岩	3.7+ α	1.45	0.2	2.8	
	244	SK2004	磨製石鏃	結晶片岩	3.5+ α	1.8	0.2	2.1	
	245	SK2004	磨製石鏃	結晶片岩	4.5+ α	1.6	0.2	2.8	
	246	SK2004	石鏃	肥島産黒曜石	3.4	1.3	0.8	3.5	
	247	SK2004	削片	肥島産黒曜石	4.2	3.0	1.0	11.8	
	248	SK2004	削片	肥島産黒曜石	2.8	3.7	1.0	7.1	
	249	SK2004	石鏃	肥島産黒曜石	3.9	3.5	0.9	11.8	
	250	SK2004	石包丁	輝緑凝灰岩	2.7	6.3	0.1~0.7	17.3	
	251	SK2004	太形始方石斧	凝灰岩	12.2	5.7	3.2	310.4	
	252	SK2004	打製石斧片	結晶片岩	9.7	5.5	0.7	72.2	
	253	SK2004	打製石斧片	結晶片岩	11.0	7.1	1.5	170.4	
89	430	検出	石鏃	肥島産黒曜石	2.6	3.3	2.0	13.9	
	431	検出	打製石鏃	肥島産黒曜石	1.8	1.3	0.4	1.0	
	432	検出	打製石鏃	肥島産黒曜石	2.8	1.7	0.4	1.9	
	433	検出	磨製石鏃	結晶片岩	2.6	2.3	0.2	1.8	

